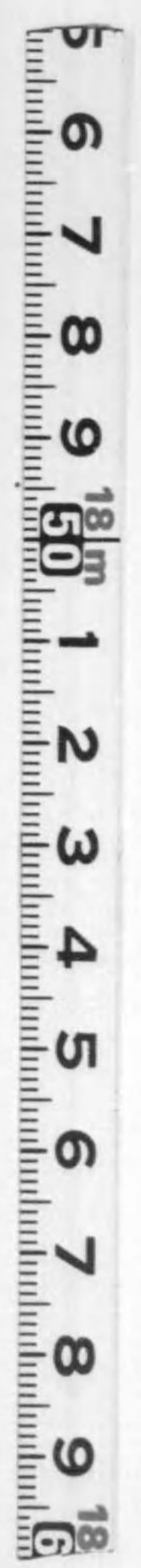


342
318



始



342-318

文學士久保良英
文學士宇井伯壽
共譯

哲學概論

東京 弘道館發兌

大正
2. 2. 4

序言

本書は奥國ウィーン大學教授イェルサレム氏の著 *Einleitung in die Philosophie* を譯出して、哲學概論と命名したるものなり。該原書は一八九九年に初めて刊行せられ、一九〇九年遂に第四版を出すに至れるもの、而して本書の譯は其の最新版たる第四版に基けるなり。

原著の目的は、之によりて所謂現代哲學を紹介する點にあるものにして、その爲めに先づ初めに諸種の重要な哲學問題を概説し、以て讀者をして豫め此等の問題の性質を知らしめ、進むで現代科學の要求に適應せる解釋法に達せしめむと勉めたり。而して其の説明簡潔にして要領を得、

行文亦明瞭にして冗語なく、種々なる方面に於て、此の種の著述としては兎に角成功せるに近きものなるが如し。殊に隨處に於て哲學の實際的意義を明にせむとしたる點は大に推賞するに足るものあり。是即ち予等が哲學概論として本書を採用して之を世に紹介する所以なり。

予等は本書を譯するに先だち、遙かに書を原著者に寄せて翻譯に關する凡ての許可を請へるに、著者は喜むて直ちに承諾を與へられたるは大に感謝に堪へざる所なり。乃ち原書によりて忠實に之を譯し、傍ら能ふ限りシー、エフ、サングラスの英譯を參照して誤の少からむことを期したりと雖、常に獨語原書を基とせるが故に、英譯に對しては、時に多少其の文章字句に於て適切ならざるものなきにあらず。

然れども終始殆んど予等の私見を挟みしことなかりき。唯二三其の説明を簡略にし、或は多少敷衍して意味の明瞭を計り、又數ヶ所に存せし詩歌をは、全く之を省略することとせり。譯書としては此の如き事を敢てせるは實に當を得ざるものなりと雖、是固より止を得ざるに坐するものにして、殊に詩歌の如きは彼國にありてこそ大なる意義を有すれ、之を我が國語に譯出しては、竟に何等の感興をも惹き起すことなかるべく、又之に代ゆるに我が國の詩歌を以てせむが如き事は不敏なる予等の到底堪ゆる所にあらずればなり。是大に原著者及び讀者に對して謝する所なり。

本書の出版に關しては文學博士井上哲次郎先生を、文義上の疑點につきては文學博士波多野精一先生を、其の他の

點につきては文學博士桑原嚴翼先生を煩はし、又種々なる方面に於て文學士鈴木宗爽君、文學士宮本和吉君に依頼せる所多かりしに、此等の恩師先輩皆快く予等の請を容れて、示教斡旋至らざるなかりしは、實に感銘に堪えざる所、本書の成る偏に此等諸先生先輩の賜に外ならず。謹むて茲に深謝の誠を致す。

本書の譯語に關しては、大體從來慣用のものにより、強いて新奇なるものを選ぶことなかりしと雖、其の二三のものにありては、慣用譯字を發見し得ざりしを以て、新に考へ出したるものなきにあらず。此等は凡て卷末の對照表によりて、容易に其の相當原語を索出するを得るが如くなし置けり。又譯文は出來得る限り正鵠を得むと勉め、殊更恩師

先輩を煩はしたれども、予等の淺學不才なる猶甚だしき誤謬曲解尠からざるべし。此等は凡て予等の不明の致す所にして、恩師先輩の毫も與り知らざる所、偏に大方諸賢士の嚴正なる叱正批評を祈る。

大正元年十二月

譯者誌

哲學概論

目次

第一編 哲學の意義及び地位	一一六
第一章、哲學の概念及び其の任務	一
第二章、哲學の心理學的起原	四
第三章、哲學の歴史的起原	七
第四章、哲學と宗教	九
第五章、哲學と科學	一四
第六章、哲學の分類	二一
第七章、哲學史	二五
第二編 豫備學科	二九—六五

第一章	心理學の對象及び問題	二九
第二章	心理學の方法及び學說	三三
第三章	心理學と生理學	四三
第四章	心理學と哲學	四五
第五章	論理學の對象及び問題	四八
第六章	論理學の發達及び學說	五四
第七章	文法學・論理學及び心理學	六〇
第八章	論理學と哲學	六三

第三編 認識批判論及び認識論

第一章	獨斷論・懷疑論及び批判論	六七
第二章	認識問題	七二
第三章	認識批判論の發達及び學說	七五
第四章	認識批判的觀念論	八三

第五章	認識批判的觀念論の評價	八九
第六章	批判的實在論	九八
第七章	認識論の發達及び學說	一〇一
第八章	感覺論	一〇四
第九章	主知論	一〇七
第十章	神秘論	一一二
第十一章	實用論	一一六
第十二章	發生的生物學的認識論	一二一

第四編 形而上學即本體論

第一章	本體論上の問題	一五七
第二章	唯物論	一六二
第三章	唯心論	一七四
第四章	實體一元論	一八〇

目次

第五章	活動一元論	一九二
第六章	二元論	二〇七
第七章	宇宙論的神學的問題。神と世界	二一七

第五編 美學の方法及び目的

第一章	美學の概念及び問題	二二九
第二章	美學の發達及び學說	二三四
第三章	發生的生物學的美學	二四六

第六編 倫理學及び社會學

第一章	倫理學の對象及び問題	二八三
第二章	倫理學の發達	二八六
第三章	自由意志の問題	三〇〇
第四章	倫理學の問題及び學說	三〇四

第五章	發生的生物學の倫理學	三〇八
第六章	社會學及び歴史哲學	三二八
第七章	教育學	三三九

第七編 結論

人名索引	一
術語索引	一一
術語獨和對譯表	五四
術語英和對譯表	七〇

三四三—三六四

目次終

目次

五

ひ方法に於てこそ實に千差萬別なれ、獨り此の點に關しては互に相一致せるを見る。故に此の意味に於て凡ての哲學は皆世界觀の研究なりといふを得べし。曾ては此の種の學說を建つるに當つて毫も特殊研究の結果を顧みず、唯純粹思惟の作用のみによりて爲す事を得と信じたる時代ありき。此の時に於ては、哲學は實に百科の學術の王として、自然并に人事の研究中、其の何れの結果が眞に確實にして價值あるものなるかを裁斷し得とせられたり。然れども此の如き時代は永久に過ぎ去れり。今日に於ては、如何なる哲學たりと雖、科學的研究の結果を冷淡視し、非難し、或は之と矛盾するが如きものなりせば、實に一顧の價だも有せざるものとせらる。故に哲學は常に科學と親密に接觸し、其の研究の結果を知悉する事を勉めざるべからず。かくする時、吾人の哲學的統一欲は初めて確實なる基礎に立ち得るが故に、進むで科學的に確實なる方法を用ひ、以て科學的經驗の範圍内に存する各部分を綜合して、統一的全體中に入らしむるを得べし。

然れども此の如くなすには唯單に窮理的思惟作用のみの與る所にあら

ず。苟も一の哲學的世界觀又は人生觀の成立し得むには、吾人の感情及び特に意志の共働すること夥しきを見る。英國のスペンサーは極めて着實なる哲學者なりしが、其の自叙傳に序して、思想體系の生ずるに方りて、吾人の感情要素が大なる働をなすこと、決して知的要素に劣ることなしといへる程なり。

抑哲學體系は、凡て吾人が煩瑣なる研究に倦める時、隱退するを得べき隱家なるが如く見るべからず。フヒテのいへるが如く、如何なる哲學を選ぶべきかは全く其の人の種類による。且つ又現今に於ては如何なる哲學も唯徒らに默想を樂むが如き事業たるを得ざるものなれば、進むで科學的研究を利用して哲學的世界觀を建設し、之によつて日常の事業を高尙ならしむると共に、吾人の決斷及び行爲に對して適切なる指導を與ふるを任務とせざるべからず。此の故に哲學は元來吾人をして高尚なる立脚地に立ち、此の世界及び人生を觀察することを教ゆるものなれども、同時に吾人をして何等爲す事もなく、白眼を以て俗社會の活動を輕視するが如きに至ら

しむべからず。要するに哲學の最高任務は、自ら高き立脚地に進みて、以て吾人に人類の高遠なる目的を指示し、更に此の目的を達するに有效なる力と確信とを與ふるにありといふべし。

第二章 哲學の心理學的起原

統一的な世界觀を得むとするの要求は、人心中に甚だ深き根柢を有するものなり。而して此の要求の最も原始的なる形式は驚愕の感情にして、プラトーン并にアリストテレスも亦已に之を以て哲學の始めなりと説けり。此の感情の生ずるは、吾人が已に有する世界觀念の何れにも調和するを得ざるが如き新奇なる現象に逢着せる時にあり。されど一般に見馴れざるものを危険物なりと見るは人情の常なれば、驚愕の感情は通例恐怖の念に伴はる。此の如きは之を實際的驚愕と稱すべし。然れども此の種の驚愕の外に、猶小兒に於て見るが如く、少しも恐怖の念と結合せざる獨立の驚愕

感情存す。之を窮理的驚愕と稱せむ。一般に思惟作用は、其の初めは全く實際上の熟慮にして、生命保存を目的として活動するものなれども、少しく發達する時は、何等直接實際上の要求に促さるゝことなくとも、自ら活動せむ事を欲するが如き機能となるを常とす。驚愕の感情も亦實に此の如く發達し來れるなり。而して此の感情の發表は、小兒にありては初めは顔面表情なれども、次には素朴なる質問となり、成人或は民族全體にありては科學的研究となり、又哲學的思辨となる。此の窮理的驚愕は人の一生を通じて失はれざるものにして、初めは單に新奇にして見馴れざるものに驚くに過ぎざれども、吾人の思惟作用の漸次成熟し來るに及びては、唯古來の傳説若しくは社會的宗教的教權の下に、今日迄殆んど無意識的に信奉せし世界觀に對して、最早充分なる満足を得難き時期來る。この時にありては、已に熟知せる物に對しても、一種新なる光を以て照らすが故に、驚愕の感情を起すを常とす。此の如く、日常の事、或は熟知し傳來せる事につきて起す驚愕こそ實に哲學の眞の濫觴なれ。

更に又此の哲學的驚愕を促進せしむる原始的事實あり。即ち吾人の精神生活是なり。換言すれば吾人の意識の統一性を感ずる事是なり。人は凡て自然并に人生に對して最も複雑多様な關係をなし又其の自我は一生を通じて自然の發達をなし常に大なる變化を蒙りて止まざれども猶且つ同一なる一全體として感ぜざるを得ざる統一的人格なるを知るが故に是より推して周圍の世界をも亦一の統一的根據によつて之を捕へ之を一全體として解釋せむと勉むるに至る。此の如き心理的事實は前にいへる凡ての哲學思索の目的中に明かに表はれたるを見る。

科學的研究の結果吾人の有する世界觀念は益々複雑となるに伴ふて、難多の中に統一を發見せむことは愈々困難となると雖、哲學的驚愕は却つて之によりて更に新たなる刺激を受け統一を得むとするの要求益々強くなるに至る。従つて哲學的思辨は特殊科學の方面より常に強き排斥と烈しき嘲笑とを受くるにも拘はらず、哲學的認識に對する衝動は決して止む時なしと斷言するを得べし。故に既成の哲學體系は一も永く満足を與ふるものな

かりしと雖、曾てシラーのいへるが如く、哲學其者は永久に存續するなるべし。

第三章 哲學の歴史的起原

多くの文明民族は相互に獨立的に一種の哲學を開拓せり。十九世紀に於ける深遠なる言語研究の結果によれば、支那人、埃及人、波斯人、特に印度人は、各豊富幽遠なる哲學的思辨を有せし事明かなり。然れども西洋に於ける思想發達の上よりいへば、十九世紀に於ける僅なる思想家を除けば、最も重要なりしものは唯希臘哲學あるのみ。此の希臘哲學は、中世紀の全體を通じて活動し、更に種々なる方面に於て近世哲學に影響し、又之を發達せしめ、其の勢力今猶盡くることなし。而して此の希臘哲學の中には、吾人が今日取扱ふが如き諸問題已に提出せられ、又吾人の用ふる諸種の概念の如きものも已に發見せられ居たりしなり。故に希臘哲學の研究は、現代諸種の問題

を深く了解せむが爲めには缺くべからざるものにして、初學者に對しては特に然りとす。

小亞細亞の西海岸に位せる所の豊饒なるイオニア殖民地に於ては、古代已に盛なる商業交通行はれ、漸次生活は富裕となりしかば、反省思惟に耽る刺戟と閑暇とを生じ、爲めに哲學的衝動を發展せしむべき心理的條件は特に豊かなりき。此の地に於て紀元前六百年の頃、タールレス以下多くの思想家輩出し、初めて宇宙の謎を解決せむと勉めたり。

然れども哲學若しくは哲學者なる名稱は、紀元前五世紀の終に至りて初めて現はれたり。希臘語 *Philosophia* は恐らく *philosophia* なる動詞より出でたるものにして、其の意味する所は、認識を得むと勉むといふにあれども、特に何等實際上の目的を交へずして、唯純粹なる知識欲より之を得むとするにあり。此の如く此の名稱の起原の中に、已に哲學に於て最も重要なものは哲學思索にありとなす重大なる真理を含み居るを見るべし。即ち哲學に於て最も價值あるものは、徒らに勞せずして得る結果に、あらずして、寧

ろ之を得むとする獨立の努力に、外ならざるなり。

元來哲學は其の一部は古代の宗教より發達し來れるものなれども、已にかく世界觀を得むと努め、最後の根本原理を探究するに於ては、自ら古來傳はれる宗教的觀念と對抗するに至らざるを得ず。故に進むで哲學と宗教との關係を明かにするの要あり。

第四章 哲學と宗教

哲學と宗教とは種々なる點に於て甚だ密接なる關係に立てり。例へば經驗を補ひて一種の世界觀を得むとする努力の如きは、兩者共通の事實にして、特に兩者とも其の初めに於ては、素朴的に、思惟及び構想作用の力に信頼し、自己の思惟及び構想活動の成果を確信する點に於て相一致せり。プラトーンの如きは、其の「觀念」の眞實性及び實在性に確信を置ける事、敬虔なる宗教信者が死後の生活を確信するに劣らざりき。

此の如き共通の性質を有するにも拘はらず、歴史的發達の初めに於て、已に大なる差異を表はし、遂に烈しき反對に立つに至る。宗教的世界觀并に人生觀の起原は、多くは日常の經驗を擬人的に想像し、情意の要求及び希望に従つて之れを組織するにあり。故に宇宙間には一種の見るべからざる精神的勢力存在し、常に人生に干渉すと信じ、次で此の信仰は同種族の各人が同じ信仰を有することによりて大に強めらる。即ち一個人の確信は他人の確信によりて鞏固となる。故に宗教的觀念及び教義は、多くの人々の精神的共同財産となり、之によつて同じ信仰を有する人々を結合する連鎖を得。従つて宗教は初めに於ては、其の教義が社會的承認を得るに基くを見るべし。而して此の共通の觀念は、傳説としての權威を得て父祖より子孫に傳はり、後には其の國家の權威によつて保護せらるゝに至るを常とす。故に宗教は、其の起原よりいへば、社會的、教權的なり。

之に反して哲學の起原は認識衝動の獨立せる所にあり。故に哲學に於ては唯理性的思惟によつて許さるゝものゝみを承認す。されば哲學は一

個の思想家が古來よりの説を検し、自ら思惟し、研究して、新しき世界觀念を案出したるものといふべし。是に於てか哲學者は、自己獨特の方向を取り、且つ屢、同胞の間に傳はれる説を批判して止まざることあり。此の點に於て哲學は、宗教とは大に其の性質を異にし、社會的教權的なる宗教と反對に、其の初めに於ては、個人的、批判的なるを見る。

事情已に此の如くなるを以て、哲學の初めて起るや、宗教的傳説に對して必らず反抗するを見る。即ち希臘哲學に於ては、此の反抗は屢、烈しく起りたり。クセノフネースは、ホーマーの歌へる諸神が人間的にして、人間の弱點すら有することを非難し、プロタゴラスは、全く諸神の存在を疑ひ、エピクルスは、理想的形式としての神格を許したるも、全く世間的事業に干渉するを許さざりき。之に反して古代已に宗教と哲學とを調和せむとするの企圖は、始まり。プラトーン并にアリストテレスは、思辨的方法によりて、唯一神の觀念に達するを得たり。但し其の神と世界との關係につきては、規定する所兩者互に異れり。又ストア學派にては、古くより傳來せる神話及び

英雄譚を譬喩的に變意して其の哲學體系中に入れ、アレキサンドリアの猶太人なるフィロ(紀元前廿年頃生)は、舊譯全書に於ける創造説を譬喩的に解釋して、純粹なる哲學的宇宙論を導き出さむと勉め、又基督教の如きも、初めは哲學的方法を利用して、其の救濟使命説の基礎を立て、之を辯護し、次で其の教理を整理せむとせしが、遂に斷然信仰を以て知識以上のものとなすに至れり。其の後、中世紀のスコラ哲學に於ては、最も熱心に基督教の宗義に哲學的基礎を與へむと勉めたりしが、間もなく凡ての宗義が必らずしも悉く嚴密なる合理的建設に堪ゆるものにあらざることを發見し、遂に自然神學と天啓神學とを分つの止むなきに至れり。而して後者に屬する神學は到底證明するを得ざるものにして、唯天啓に基きて之を信ずるの外なきものなり。此の如くして、一旦調和せられたるが如くなりし宗教と哲學との對抗は、再びスコラ哲學中に於て明に表はれ來れり。

近世哲學は十七八世紀に發達せる自然科学によりて感化せられ、殊に數學によりて大なる影響を受けたりしかば、當時の學者は一方に於ては觀察

并に實驗を以て、經驗的認識の最も確實なる源泉なりとし、他方に於ては數學を以て、外見上經驗より全然獨立し、理性其者より出づるが如き絶對的確實なる真理の體系を與ふるものと考へたり。かくして吾人の認識能力は大に増進せるを以て、哲學は自ら深く之に信賴し、進むで諸種の宗教問題にも容喙するに至れり。而して此等の問題は、今猶熱心なる考究の對象をなしつゝあるを見る。

十八九世紀に於ける唯物論は、凡ての宗教を以て單に幻想に過ぎずと見、凡て此の種の問題を科學界より驅逐せむと欲せしが、最近に於ける歴史的特に人類學的研究の示す所によれば、宗教的觀念は人類の住する所に於ては存せざる所なく、従つて此は人類精神の根本思想の一なる事明となれり。哲學と宗教とを調和せむとする企は全く望なき事と速斷すべきにあらず。蓋し少しも先入主なき公平なる哲學的研究の結果は、純粹なる宗教的觀念と一致し得べき事は、決して拒否すべからざる事實なればなり。古代に於ても、亦現代に於ても、宗教的觀念が哲學的思辨の爲めに純化せられ、又

理論に於ても、實際に於ても、科學的世界觀に接近せしめられたる事甚だ多く、且つ宗教の如く、しかく普遍的にして深く文明生活に浸潤せる現象に對し、哲學は決して之を不問に附すべきにあらざること勿論なり。故に哲學は最近に於て著しく發展せる比較宗教學の結果を知悉し、之を他の諸科學の結果と同じく自己の包括的活動中に入れて觀察せざるべからず。是に於てか問題は自ら哲學と特殊科學との關係に移り行くなり。

第五章 哲學と科學

哲學は希臘に於て初めて表れたる時は、理論的科學と同一なりき。認識の爲めに認識を得むとする努力は、哲學の特質たると共に、又科學の特質たり。殊に科學的に自然を觀察する事は、希臘にありては全然哲學者の任務なりき。而して此の方面の發達は、アリストテレスに至りて其の頂點に達せしが、同時に又其の變化點をなせり。氏は其の當時に於ける、あらゆる

知識に通じて之を綜合組織せしが、是より以後科學は漸次互に分科を初め、同時に哲學より分離獨立し、爾來徐々として其の分離獨立を完成するに至れり。而して人類の精神は、不斷の努力によりて、漸次、幾多の已に觀察せる事實より、作用活動の法則を歸納し、此の法則によりて自然を解釋し、制御するを得るに至り、更に又年月の經過と共に、益、分化せる各科によりて、豊富な事實材料蒐集せられ、複雑なる方法及び概念發見せられたれば、今日にありては此等のあらゆる知識を領し得む事は、一個人に取りては絶對的に不可能となれり。此の如くして個々の科學は各、大に發展したりと雖、凡ての知識間の聯絡は較もすれば失はれ易からむとす。

此の如き危険は、更に十九世紀の後半に於て、多くの特殊科學者が、凡ての哲學的研究に對して、一般に嫌惡せるが爲めに益、増大せられたり。此の嫌惡の生ぜるは、哲學が長き間、諸科學の王として認められ、自ら凡ての知識の最高最後の問題の裁斷權を要求せるに由る。例へば自然科學上の問題に於てすら、哲學は是が裁決をなさむと欲せしのみならず、又屢々精細なる觀

察と確實なる證明とによれる事實を拒み、甚しきに至りては、其が自己の哲學體系に適合せざるが故に不可能なりとなす事すらありき。

此の不正なる要求は、特にヘーゲル及び其の學徒より提出せられたるものなりしが、自然科學は該要求に對して極力其の獨立を承認せしめ、同時に觀察と實驗とによりて發見したる事實并に法則は、凡ての哲學的思辨より離れて、其の價值を有する事を證明せざるを得ざりき。されど本來よりいへば、かくして發見せられたる事實こそ、實に科學的哲學を建設する基礎たるを得るなれ。

十九世紀に於ける自然科學及び工藝學は、全く豫想外の結果を表はしたるを以て、之を見たる多數の研究者は皆謂へらく、事實上吾人の認識を増進せしむる研究方法は、一方に於ては觀察及び實驗に基き、他方に於ては數學に基くものにして、彼の凡ての哲學的思辨の如きは、之に反して何等の價值をも有せざる無益の遊戯に過ぎざるものなりと。

更に此の自然科學的方法是精神生活の研究を任務とする科學にも應用

せられたり。例へば言語宗教道德及び其の他凡ての社會的制度の發達の如きも、猶統計法并に比較法によりて研究せられ、同じく事實を尊崇し、思辨を輕視する傾向多きに至れり。

現代に於ける有名なる研究者の主張する所によれば、科學とは經驗を経済的に組織したるものにして、其の任務は自然界并に精神界に於ける過程を、能ふ限り簡單に記載するにあり。此の定義の中に含まれたる要求は、即ち凡ての事實を托ぐることなく、其の過程に對しては最も忠實に、其が起るが如く考察すべしといふにあるものにして、此の如き要求は、凡ての科學的研究に對する方法的規則として甚だ大なる價值あるものなれば、例令反覆之が注意を促すとも決して重言の嫌なきなり。

翻つて考ふるに、吾人が凡て經驗せる事を統一し、以て自然及び精神を完全に理解せむとする深き要求は、如何なる方法的研究法を用ゆるも、決して外界より出づるものにあらざると共に、又吾人の知る凡ての事實は、一度吾人の精神によりて整理せられて、初めて鞏固なる知識たり得るなり。蓋し

凡ての科學的研究には普遍的特性として、必らず吾人の知覺及び思惟作用の存せざることなく、否之によりて其の研究も初めて可能たるを得るものなればなり。加之科學は本來作用活動の法則を知らむとするものにして、個々の事實の認識は、必らずしも其の目的とする所にあらず。故に凡ての特殊研究も、其が自ら科學たる名稱に背かざらむが爲めには、必らず常に眼を全體の上に注ぎ居らざるべからず。

此の如くなるを以て、最近に於て有名なる特殊科學者間には、廣く凡てを綜合し、又深く自己を解せむとする要求著しく表はれ來れり。化學者ウィルヘルム、オストワルトは、先に自然哲學講義を公にし、又同時に雜誌、自然哲學年報を經營して、科學的研究の一般問題を説明し、更に科學的方法及び其の認識價値を研究するを目的となせり。又歴史研究者も、唯單に事實材料を蒐集するのみには飽きて、一層深く歴史的發達の意義を解せむと要求せられり。是に於てヘルデル及びヘーゲルの開ける歴史哲學は、再び注意せらるゝに至りしと雖、事實に對する知識は人類生存の土地の擴張と共に増加

せるを以て、其の結果一層廣汎にして具體的なる基礎を得るに至れり。

かくして有名なる特殊科學者は、漸次人類の知識は凡て共通の基礎と、共通の目的とを有する事を意識し來れり。而して凡ての知識の基礎を研究する事は、カント以來特に哲學の最も重要な任務となれる者にして、現代の有名なる思想家も、あらゆる知識の基礎及び假定を研究する事を以て、哲學の最重要なる、否唯一の任務と認めむとし、従つてフイヒテが提出せる、知識の學なる概念も復活し來れり。然れども予の見る所によれば、更に一層有效にして意義ある觀察は、此等が互に其の目的を共通せる事を知るにあり。即ち凡ての科學は實際上の要求より生じたるものにして、其の最高最後の目的は、人類の生活を豊富にし、幸福にするにありといふ點にあり。

科學も哲學も共に眞理の探究を事とすることは勿論なりと雖、眞理なる概念は最近に於て多少其の内容を變化したり。即ち眞理とは決して思想と事實との間に於ける永久不變の靜的關係にあらずして、寧ろ人生の完成に導く、一種動的のものなりと解釋するもの多きに至れり。故に一の斷定

を以て眞理なりといふことは、其の斷定が自然に對する人類の努力を増さしめ、或は人類の活動に有效なる影響を與ふるをいふなり。此の如く科學が眞理を探究し、之によつて各個人をして自然及び精神を制し易からしむると同じく、哲學の目的も亦決して徒らに默想に耽るが如き點にあるにあらざりて、生々たる感化を及ぼし、目的を與へ、標準を示すにあるなり。然らば哲學は科學なりや否や。此の問題に對してはシラーの語を借りて答ふべし。シラー曾て藝術家なる詩につき、此の詩は詩よりも大なるものなるが故に、決して詩にあらざるといふことなしといへり。之と同じく哲學も亦科學よりも大なるものなるが故に、決して科學にあらざるといふことなしと云はん。

哲學は、それが科學的基礎に立ち、科學的研究資具を用ひて研究する點よりいへば、科學に外ならざれども、進んで經驗を整理し又之を補はざるを得ざる點、并に調和的世界觀を得むが爲めには想像及び情意をも共働せしめざるべからざる點に於ては、即ち科學よりも大なり。故に現代の哲學者は出

來得る限り廣く科學的研究の結果を採用し、更に各の特殊科學の案出せる方法概念を知悉せざるべからず。此の如く科學を以て其の基礎となし、其の上に道德的勇氣と藝術家的天才とを具へて、初めて茲に經驗を超出し、特殊科學の結果を綜合して、一體系を組織するを得るなり。

若夫れ哲學者が自ら熱心に研究し、巧に組織せる世界觀によりて、會心の満足を見し得ることは、彼の將軍が勝利に満足し、藝術家が其の作品に満足すると毫も異なる所なし。此の如き世界觀こそ、實に其の人の信仰にして、同時に將來依據せらるべき綱領たるなれ。是に於てか初めて科學、藝術、并に宗教は調和せらるゝことを得。但しこは常に科學を以て其の基礎となし、又其の方法は必ず科學的なることを假定して後なるを忘るべからず。

第六章 哲學の分類

希臘以來、哲學には三分法傳はり來りしが、こは紀元前三世紀の初め、即ち

アリストテレスの死後間もなき頃より認められたるものにして、其の所謂三部分とは即ち論理學、物理學及び倫理學是なり。

論理學とは認識思惟の法則并に眞理の標準の研究をいふものにして、後には蓋然性の研究をも含ましめたり。

物理學とは自然科学、自然哲學、宇宙論并に靈魂及び其の運命の研究を含む。後に至りて形而上學なる名稱表はれたり。形而上學とは、事物の本質として吾人より獨立に存立し、而かも現象と異なる實在を研究するものをいふ。此の名稱の起原は甚だ偶然なりしが、爾來其の名稱、概念共に其の儘に保存せられたり。然れども此の部分の哲學は、寧ろ之を本體論、即ち實在の研究と名づくる方至當なるが如し。

倫理學とは人倫の研究をいふ。されど古代に於ける人倫の意味よりいへば、倫理學は道德的義務の本質を研究する學といふよりも、寧ろ最高善の學なりといふべし。故に國家及び其の形式を研究する政治學は倫理學の一部をなせり。

此の外美及び藝術の研究につきては、數、プラトーン、アリストテレス及び殊にプロチンによりて論ぜられたりしが、古代に於ては、未だ獨立せる哲學の一部をなすに至らざりき。

論理學、物理學、倫理學に分つことは中世紀を通じて遵守せられ、今日に於ても猶哲學史を叙述するには多く之に基くを見る。近世に入りてフランシス、ベーコン(一五六一—一六二六)及びクリスチャン、ウルフ(一六七九—一七五四)ありて、心理學に基きて新なる分類をなさむと勉めたり。カント(一七二四—一八〇四)の分類の如きも、亦此の基礎に立つものにして、現今猶其の影響を被ること甚だ大なり。

カントは其の初め、純粹理性批判を公にして知識の哲學を論じ、次に、實踐理性批判に於て意志の哲學を述べ、更に、判斷力批判に於て感情の哲學を説きたり。

吾人は以下に於て大體此の分類に依るべしと雖、此の中第一の知識の哲學は之を二編に分ち、前編に於ては認識の可能限界并に其の起原に關する

問題を説明し、後編に於ては認識の對象につきて研究すべし。故に前編に於ては認識の批判及び理論を説き、後編にては本體論を述ぶる事となるなり。感情の哲學は即ち美及び崇高を研究する學に外ならず。此の學は十八世紀の中頃以來美學と稱せられ、爾來哲學體系の一部をなせり。

意志の哲學は即ち行爲の條件及び規範を求むるものなり。故に此は實踐、哲學、即ち倫理學にして、古來哲學體系の重要な部分をなせるものなり。然れども人の行爲を導くものは、單に個人意志のみならずして、集合意志も亦與りて力あるものなるが故に、倫理學に加ふるに人類社會の本質を研究する社會學を以てすべく、更に又教育學の一般原理につきても二三の注意をなすべし。

然れども此等凡ての哲學的問題を説明せむには、先づ豫備的學科たる心理學及び論理學を一瞥せざるべからず。心理學は近來哲學的思辨より離れ、純粹に經驗的方法により研究せらるゝ所の、獨立せる一科の學なりと雖、凡ての精神科學に對して缺くべからざる基礎をなすを以て、之によりて哲

學と密接なる關係を有するに至れり。論理學は嚴密にいへば、凡ての科學の準備として重要なりと雖、哲學に於て殊に然るを見る。何となれば哲學は普遍的原理によりて、特殊科學の研究結果を組織すべきものなればなり。又更に哲學研究の重要な部分として哲學史あり。或る時代に於ては哲學の任務は全く哲學史の研究に限られむとしたる程なりき。故に此の研究の意義につきて尙一言を費すべし。

第七章 哲學史

哲學を研究するに、其の歴史上の知識の甚だ必要な事は、到底他の學術に於て見る能はざる所なり。例へば數學若くは物理學を以て専門學となすものは、其の研究の方法、概念及び其の結果等を知悉するに、必らずしも其の起原及び發達を歴史的に探究せざるも可なり。唯最も細き研究に進みたる時、漸く歴史的要求を感じ始むべく、是に於て始めてエルンスト、マッハが

屢、物理學につきて、其の根本概念を深く十分に解せむには、歴史的に其の發達を知らざるべからずといへる理由を解し得るに至るべし。

然るに哲學に於ては、此の關係は全く別異なるものあり。即ち哲學にては如何なる問題にても、之を正しく解せむが爲めには、其の歴史的發達の知識なければ殆んど不可能の事なり。例へば予の眼前に存在せる事物、頭上を覆へる蒼空、周圍を環る家屋、原野并に樹木等は、凡て皆予の表象にして、予が之を知覺する限りに於て、知覺としてのみ存在するに過ぎずと説く時、卒爾に之を聞かば殆んど妄想と考ふる外あらざるべし。然れども、若し此の説の歴史的發達を知る時は、何人も之を理解するを得べく、又之によりて批判的態度をも取るを得べきなり。

故に哲學史上の重なる事實を知る事は、哲學問題を了解するに缺くべからざる豫備的條件なり。此の意味に於て、哲學研究は常に哲學史研究を以て始むべしといはる。

更に又哲學史の研究は自ら哲學思索をなすを目的とせざる人々にも甚

だ有要なり。人類の精神が漸次世界を征服し得たる概念の起原及び發達を知るを得るは實に哲學史研究の賜なり。然れども此等の方法の如きは、多くは、餘りに通俗普通なるが爲めに感謝せらるゝこと、殆ど之なきものなり。例へば今日多くの物に於て質料と形式とを分つが如き、又は可能態と現實態との概念が甚だ普通に用ひらるゝが如きは、古代に於てアリストテレースが初めて之を發見して使用の道を開きしによると雖、多くは之を忘れて何等感謝の念を起さざるを常とするが如し。

思惟の具たる概念の漸次發達せる徑路を知るは、哲學史の研究より生ずる最も大なる所得なり。而して現今に於ては、此の方面を叙述せるものに乏しからざれば、之によりて此の點を一層明にすべきものなり。

然れども哲學史は、勿論單に哲學たるにあらずして、同時に歴史なり。故に或る時代の精神的内容は、其の時代に起れる哲學體系中に、明に、又最も深く印銘せらるゝを常とす。例へば既に屢、人の述べたるが如く、カントの無上命令は、普魯西國民の義務觀念の結晶せるものにして、又キニック學派及び

ストア學派の世界主義は、明に希臘の國民感情の沈衰を表はせるものなるが如し。

要するに哲學史は、哲學研究の重要な要素をなすものなれども、此の研究は絶えず増加する新術語を知悉せざるべからざるが爲めに甚だ困難となれり。故に本書に於ては、最も重要な術語を精密に説明し、以て哲學史研究に資せむことを勉め、又一々の問題を述ぶるに先ちて、少しく其の歴史的發達を概記し、以て讀者をして歴史的發達の最も重要な事實を知らしめ、之によりて又哲學史研究の手引たらしめむと期せり。

第二編 豫備學科

第一章 心理學の對象及び問題

心理學は精神生活の法則を研究する學なり。故に其の對象は人類の精神生活其者なる事いふ迄もなし。而して精神生活とは、思惟感情及び意志にして、日常毎に精神的活動として實際に經驗せらるゝもの、換言すれば、此の如き經驗として直接に與へられ、知られたる凡てをいふなり。従つて心理學は出來事即ち作用活動のみを研究し、決して靜止せる實在を研究する事なし。例へば吾人の心理的現象には一定の支持者ありや、否や、即ち精神活動は靈魂の如き不變固定の本質より出づるものなりや、否や、の問題の如きは、心理學の研究に屬するものにあらずして、全く形而上學即ち本體論上の問題なり。是と等しく靈魂の位置、其の單純性及び不滅性の問題の如きも、亦本體論上の研究に屬す。而して凡て此等の事につきては、多くの宗教

は自ら宗義を立て、其の教權を以て信者に之を信ぜしむるを得べく、又科學的哲學も此等に關し精細に研究して後、多少の假定を立つるを得べしと雖、心理學は全然此等の事に觸れずして、唯吾人の知識中にて、最も確實なる事實の一たる精神生活を討究し、其の過程を最も單純なる要素に還元し、而して其の中に存する法則を發見する事を勉めて止まざるものなり。

然れども心理學は之によりて宗教上の宗義若しくは哲學上の假定に反抗せむとするにはあらず。寧ろ心理學は精細に精神生活を研究して、凡ての形而上學的、神學的宗義に貢獻せむとするなり。而して心理學が敢て精神の本質につきて説明をなさざることは、恰かも機械論が勢用の本質につきて關說せざると異なることなし。蓋し兩者共に唯作用活動の法則のみを研究するものなればなり。故に心理學は其の純粹經驗的特質と、及び其の方法とに於て、著しく自然科學と相近けれども、之と反對に其の對象に關しては全く相異れり。以上述べたるが如くに心理學を解する事、并に此の學が凡ての形而上學より獨立せる事は、實に最近に至りて贏ち得たる結果なり。

りとする。

又人には凡て靈魂ありて肉體と全く異り、其の死後は體を離れて更に獨立に存続すとの信仰は、人心中に深き根據を有するものなれば、原始民族の如き最低の文明程度にあるもの、中にも存し、又宗教に於ても此の信仰を採用せざるものなく、哲學體系に於てすら之を以て自明の假定として許容せり。従つて心理學も古代・中世・近世を通じて靈魂に關する學として、形而上學即ち本體論の一部をなすとせられたり。然れども精神生活の事實を観察することも、比較的早くより開け、プラトーン・アリストテレスは此の方面に多大の貢獻をなし、醫師ヒポクラテス及び其の學徒、并に希臘哲學末期のストア學派、エピクル學派特に詩人哲學者ルクレツ及び新プラトーン學派(特にプロチン)も亦多くの效績を遺せり。中世紀のスコラ哲學すらも全然寄與する所なきにあらざりし事、ジーベックのいへるが如し。近世の初めに於て、此の問題は又盛に研究せられ、英國に於ては十七八世紀にジョン・ロック・ジョージ・バークレー・デービッド・ヒューム・アダム・スミスの如き學者が、精細な

る分析研究によりて事實的精神生活の知識を促進せしめたる所甚だ多かりしが、遂に一八二九年ジームス、ミル(有名なる論理學者にして經濟學者なるジョン・スチュアート・ミルの父)の出だせる「精神現象の分析」によりて、初めて形而上學より獨立せる精神生活の論述現はれたり。獨逸のヘルバルトは、精神生活の現象に數學を應用せむと企てしが、其の結果遂に經驗的心理學をして一科の學たらしめたり。

ヘルバルトの高足ヘルマン、ロッツェは、一八五二年に醫學的心理學を公にして、初めて精神生活を以て、之に伴ふ生理現象と關係せしめて論究したりしが、次でフヒネル及びヴントは、此の關係を一々精密に研究し、同時に精神生活の現象に實驗を施さむと企てたり。故に此の二人は現代心理學の開拓者とも稱すべきものなり。殊にウイヘルム、ヴントは、一方には一八七四年初めて其の基礎的著述「生理的心理學原理」を出版し、他方には一八七九年心理學實驗室をライプツヒヒに創設して斯學の發展を促がし、自らも亦之に寄與せる所甚だ多し。爾來、此の實驗室に範りて獨英佛伊殊に米國に於て數

多の實驗室設立せられ、各熱心に精神生活の實驗的研究に従事しつゝあり。かくの如くして、心理學は凡ての哲學的思辨より離れて一科の獨立せる經驗科學となり、精神的生活を取扱ふ凡ての精神科學の基礎をなすものとせらるゝに至れり。是に於てか多くの方法及び學說等生じ來れり。以下是等に就て少しく説明を加へん。

第二章 心理學の方法及び學說

凡ての經驗科學と同じく心理學も亦第一には、能ふ限り多くの事實を蒐集せざるべからず。之に次いでなすべき方法は、今作用しつゝある活動を觀察するにあり。然れども心理學に於ける觀察は、他の自然科學に於ける觀察とは甚しく相異せり。蓋し心理學的現象は、自然作用の如く感官によりて知覺し得べきものにあらざして、唯何人も知ると雖、詳しく言顯はし得ざる一種の方法によりて、直接に經驗せらるゝのみ。即ち人は唯自ら自己

の意識中に起れる心理的過程を、經驗によりて知ることを得るなり。故に事實を蒐集するにも自ら主觀的に經驗せる事を觀察し、判斷する外なきなり。従つて心理學者の研究に最も重要にして且つ根本的なる資料を與ふるものは、自己觀察、即ち自己の心理的經驗を觀察する事なり。斯の如く此の自己觀察法は、第一に行ふべき重要なものにして之を内省法と稱す。

然れども此の内省法は、其自ら多くの困難と矛盾とを含む。何となれば、自己の心理的經驗を觀察する事は、是れ即ち精神活動の一に外ならざれば、其の活動の性質上、觀察せらるゝ現象に影響し、遂に之を變化せしめ、又は之を中止せしむるに至るべければなり。例へば若し怒の發せる際、其の中にありて自己を觀察せむとせば、恐らく其の瞬間に於て怒の感情は冷却するに至るべし。故に或る學者は自己觀察を以て、全く不可能なりとし、内省法を以て無用なりと考へたり。然れども此の如き考は決して正しきものにあらず。例へば感官知覺の如き、又は單純なる感官的、美的感情の如き要素的經驗は、多少の練習をなさば、殆んど變化を興ふることなくして直接に觀

察するを得べく、又複雑なる過程にありても、之を回想し再起せしめて、後より之を觀察するを得べければなり。此の場合に於ては、内省法は回想と全く一致するを以て、觀察より起る影響は殆んど全く之を除くを得べし。

已に事實を觀察せば、次には之を分析解剖せざるべからず。日常經驗する凡ての過程は、之を細に檢覈せば、多くは皆複合的なるものなれば、進んで此の如き過程を生起せしめ、又は成立せしむる要素的過程を發見すること、を勉めざるべからず。故に内省法の中心は分析にありといふを得べし。

然れども内省法に基く分析は、比較的速に其の限界に達す。例へば視覺の如きは、自己觀察によれば單純にして更に分析するを得ざる過程なるが如し。茲に於て、此の缺點を補ふ爲めに實驗法なるものあり、以て内省法の限界以上に分析を行はしむ。

心理學に於ける實驗法は、自然科學に於ける其れと同じく、心理過程の生ずる條件を任意に作り、又は其の分量并に性質を隨意に變じ得る如く作るにあり。一般に心理學の實驗には、實驗者と被験者との二人あり。實驗者

は諸の條件を作り、又之を毫も被験者に知らしめずして變化せしめ、而して被験者は其の印象を言語又は他の符號によりて顯はすなり。此の時被験者は自己觀察を行ふこといふ迄もなし。然れども、あらゆる缺點を除いて常に正確なる結果のみを出し得むが爲めには、勿論多少の練習を要す。又此の心理學的實驗の特質は、多くの被験者を用ひて多くの實驗をなし、以て有要なる結果に達し得る事にあり。故に成るべく永く之を繼續して觀察を精密ならしむるを要す。或は同一範圍に於て、種々なる事情の下に繰返し、幾年も其の實驗を繼續する事すらあり。尙又豫期の結果を出す能はざるが如き誤れる實驗をも、之を精しく記載し置くは重要な事なり。

實驗法は最近に於て著しく發達し、又複雑なる多くの機械も發明せられ、爲めに實驗は容易となり、結果は精確となるに至れり。特に感官知覺を分析する方法の如きは、大なる成果を收めたり。例へば視覺の生ずるには網膜感覺の外、眼球の運動及び其によりて生ずる筋肉感覺の如きも亦重大なる意義を有せる事を知れるは、皆此等の分析の結果に外ならざるが如し。

觸覺に於ても亦然り。一般に筋肉感覺の大なる意義は、實驗法によりて初めて知られたるものにして、其の結果精神生活の性質に關する考を變化せしめたる所甚だ多し。例へば表象の一時的經過、聯想の法則、記憶作用、感情説、殊に感情に基く脈搏の變化、并に要素的、美的感情等の如き、皆實驗法によりて明にせられたるなり。故に將來に於ても、亦幾多重要な發見が、此の方面に於ける協同研究に俟つ所甚だ大なり。

此等内省法及び實驗法の外に、猶他人を觀察する事も亦必要なる資料を供給するものなり。但し此の方法に於ては、直接に心理過程を觀察し得ざるを以て、動作、顔色、言語等の身體に顯はれたるものを觀察し、此によりて過程其者を推定するの外なきなり。従つて此の推論の基礎は、觀察者自身の主觀的經驗に存すること明なり。此の如き觀察は、之を小兒又は認識機關を失へる人々に於てなす時特に重要なり。生盲、啞者又は盲啞者の如きは、吾人に多大の材料を提供するを以て、此等の人々を觀察して、或る重要な發見をなせることも尠からず。例へば盲啞者ラウラ、ブリッチマン、ヘレン、ケ

ラー及びマリ、ホイルチンを教育せる結果、人の觸官は如何なる作用をなし得る能力ありや、又言語は思惟作用の發達に如何に關係するやを明にせるもの甚だ多きが如き是なり。

已にいへるが如く、分析は觀察したる過程を其の要素に分解することにして、内省法と最も密接に關係するものなれども、元來心理過程は、常に唯作用活動としてのみ表はれ、決して固定的實在たることなきを以て、分析的觀察は自ら發生的觀察となるべし。發生的觀察とは精神生活を發達的に見、如何なる過程が最も原始的なるものなりやを知らむとするをいふなり。蓋し過程の要素を研究すれば、自ら其が如何にして、何處より生ずるかの生起の問題に入るを以てなり。

然れども發生的觀察法は、自ら個體を越えて、吾人の住する社會を以て、精神發達の重要な要素と認めざるを得ざるに至る。如何に古代に遡りて人類を觀察するも、至る所常に人類は社會的生物、群居的動物として生存するを見る。アリストテレスが、人類は其の性質上、社會的生物なりといへ

る語は、現代の人種學上完全に證明せられたり。故に個人の精神生活に内容を與へ、又之を發展せしむるものは、周圍の自然、及び共に生活せる同胞等なり。故に個人心理學は、進みて社會心理學、或は民族心理學とならざるを得ず。此の科學はラザルス并にシュタインタールによりて開かれたりしが、最近に於て最も著しき進歩をなせるものなり。ウィルヘルム、ザントは民族心理學に關する重要な著書を出版して、言語、神話及び風俗等を民族心理學的に論じ、以て嶄新重要な研究を始めたなり。之と同じくアドルフ、バスタンスの著書も亦價値多き材料を供給す。故に凡ての心理學者は、現今に於ける人種學の結果を熟知し、深く精神生活の發達に於ける社會的要素を觀察せざるべからず。ダーウイン曾て其の名著種の起原中に於て初めて、個體の發達に對して個體發生なる語を用ひ、又種の發達に對して系統發生なる語を用ひたりしが、今此の語を借りて言へば、心理學は個體發生的方法を用ゆるのみならず、更に又系統發生的方法をも用ゆべき事を要求せざるを得ず。即ち個人を個體として見、更に又同族間の影響の點をも觀察すべ

しといふにあり。

若し夫れ精神作用の起原及び發達を研究せむとせば、勢ひ其の作用が生命保存と密接に關係せる事を見るに至るべし。元來吾人の反省熟慮の多くは個人、家族或は其の社會の生命を維持し、其の生存をして一層愉快にし、又一層意義ある永續的のものたらしむるが如き、實際的目的を有するものなれば、若し此の如き立脚地より、凡ての精神生活を觀察せむか、心理學は生命一般の法則を研究する生物學の一部となるに至るべし。此の生物學的方法は精神生活の關係を明にせる所甚だ多く、特に豊富なる感情生活を精細に觀測し、理解することを教へたり。近代に於てハーバート、スペンサーは、此の生物學的方法を應用して大に成功したりしが、著者も亦先年公にしたる心理學教科書中に於て、嚴密に此の觀察法を守らむと勉めたりき。之を要するに、内省法と實驗法とは精密なる分析の助によりて、心理的事實を能ふ限り、精細に規定せむとし、發生的觀察法は、個體發生的并に系統發生的方法を生物學的方法と結合して、精神生活の起原、發達及び其の意義を

探究せむと勉むるなり。

此の如き方法の中、何れを特に應用するか、或は精神的過程の根本種類の何れを重く見るかによつて、種々なる學說起り來るなり。以下現時の心理學に表はれたるものを説明せむ。

古くより唯理的、即ち思辨的心理學と、經驗的心理學とを區別すること流行せしが、現今に於ては、こは全く意味なきこととなり。蓋し唯理的心理學と稱せしものは、現今に於ては形而上學の一部をなすものにして、心理學より排斥せらるゝものなればなり。従つて心理學の經驗的なるべきは自明の事なれば、經驗的て形容詞は殆んど無用の文字となれるなり。

之に反して、其の用ゆる方法より見て、内省的心理學と實驗的心理學とを區別す。而して此の兩學説は、時としては烈しく相争ふ事あり。内省的心理學者は、實驗的心理學者の長き間の研究の結果が、遂に無意義に終ること多く、又其の結果が數、心理學よりも寧ろ生理學に有要なる事多きを非難し、實驗的心理學者は、内省的心理學者を机上心理學者なりと嘲笑し、心理學は

其の實驗室に於てのみ、精密に研究せられ得と主張して止まず。

最近に於ては、此の兩者を結合する方法研究せられ、殊にヴェルツブルグに於ける心理學實驗室(指導者はオスワルト、キルペ)に於て用ひらる。此の方法は、精密に規定せる條件の下に、一種の自己觀察を施すにあり。而して此の方法によりて、斷定に於ける過程、特に複雑なる思惟過程は、精細に研究せられたり。

以上いふ所によりて之を見れば、二種の學說の行はるゝ事、并に實驗と内省とを併せ用ひ、又精密なる分析をなすによりて、初めて斯學を進歩せしめ得る事明なり。

更に心理的過程其者を評價するに、古來多く知覺及び表象を以て原始的状態となし、感情及び意志の如きは之を派生的のものとなす意見行はれ、今日にても猶之を信ずるもの甚だ多し。之を主知的心理學と稱す。

之に反し表象を以て原始的と見ずして、感情及び欲望を以て最も原始的状態と見、感覺、知覺、表象の如きは、是より發展せるものなりとなす新研究者

あり。此の說は生命の發達史に一層よく適合する學說にして、之を主意的心理學と稱し、漸次多くの贊同者を得つゝあり。

第三章 心理學と生理學

心理的過程と生理的過程、即ち心身の間、密接なる關係ある事は、古くより知られたる事にして、古來有名なる學者の盛に研究せる所なり。而して此の關係より生ぜざる哲學的問題及び其の解決につきては、後章更に論ずる所あるべし。

現今の心理學よりいへば、殆んど凡ての心理的過程は、必らず生理的過程を伴へる事は、疑ふべからざる事とせらる。又心理的過程の生ずる直接の條件は、常に神經作用にして、其の最後に於ては、腦髓が之に關係するものなる事も亦確實なる事實なり。此の說の正確なることは、如何に嚴密なる研究者と雖、腦なくしては決して意識現象の起る事なきを確信せざるを得ざ

ると相同じきなり。之に反して、或る現象が心理學的分析によりて分解せられたる時、其の部分的過程も亦其に相當せる生理的部分過程を豫想せざるべからざるや否やに付きては、學者間に異説多し。例へば、ヴェントの如きは、知覺の起るには其の對象によりて起されたる多くの感覺が、聯想的綜合の作用によりて結合せらるゝに由るとなし、而して此の綜合作用は純粹心理的性質を有し、決して何等の生理的過程をも伴はずと主張せり。

心理的過程が、腦髓過程に密接に相依れる事實を見て、多くの研究者は心理學の任務を以て、腦の機能に關する知識を明にするにありと信じ、遂に心理學は生理學の一部に過ぎずと解するに至れり。

然れども吾人は之に對して、心理的過程は全く自己特有の性質を有するを以て、生理的現象とは全然異なるものなる事を指示せざるべからず。元來自然界の諸現象は、凡て感官知覺若くは顯微鏡の如き、知覺能力を助くる装置によりて知るを得るに至るべきものなり。吾人の身體も亦此の一部となる事いふ迄もなし。或は猶未だ知り得ざる點多しと雖、漸次此等の装置

の完成するに伴れて早晩知覺するを得べく、從つて如何なる自然過程にて、感官知覺の達し得べからざるものあるべしとは考へられざるなり。然れども、心理的過程は、前にもいへる如く、一種特有の直接的方法によりてのみ經驗し得らるゝものにして、決して感官を以ては知覺し得べきにあらず。従つて其の研究は特別なる一科の科學をなさざるを得ざるなり。

要するに心理學は生理學によりて刺戟を受けて、更に其の分析を精密にすると同時に、生理學に對しては又問題を提供し、其の方法を指示する事多し。然れども心理學は決して獨立の一科學たるを失ふものにはあらず。蓋し其の對象が常に他の自然科学のそれと相違せるを以てなり。

第四章 心理學と哲學

前に述べたるが如く、現代の心理學は凡ての哲學的思辨より獨立して、一科の經驗科學となりしと雖、猶心理學と哲學とは其の間に密接なる關係を

有す。然れども此の關係が古來の考と幾分反對をなすに至れるは、蓋し當然の結果なるべし。即ち嚴密にいへば、心理學者は必らずしも凡ての形而上學的假定を要せざれども、哲學者は必らず心理學的分析に精通すべき要ある事、到底昔日の比にあらざるなり。

哲學にして若し其の統一的世界觀を建てんとする目的を實現せむと欲せば、自然科學の示すが如き物理的作用活動の法則よりも、更に深く心理學の研究する心理的作用活動の法則に注意せざるべからず。現今に於ては哲學者は心理學を基礎として初めて認識の限界を定むるを得べく、又心理學の助によりてのみ、認識の形式を發見し了解するを得べきなり。更に又吾人が或物を以て美なりと感ずるは、果して如何なる條件によるかは、唯吾人の感情を心理的に分析してのみ之を知るを得べく、此の條件を知りてこそ、初めて藝術家に對し適切なる規範を與ふるを得るなれ。猶又吾人の行爲に對し道德的規範を發見せむには、必らず吾人が他人の行爲に賛同を表する場合、若くは自ら満足する時、或は満足せざる時に、吾人の心内に起る諸

現象を精細に研究せざるべからず。

此故に、心理學は純粹なる科學的哲學に對して最も重要なる基礎を與ふるものなり。然るに、若し之を忘却し、又は思辨にのみ信賴して、無謀にも心理學の基礎を排斥するが如きことあらば、其の結果は遂に空中の樓閣と何等選ぶ所なきに終るべし。

然れども心理學は其自ら如何に哲學を排斥するも、必らず哲學的問題に移らざるを得ざるなり。

已に感官知覺の方面に於ても、吾人は視覺或は聽覺よりは、一層深く觸覺に信賴するが如き著しき事實あり。心理學は唯此の事實を記載するのみを其の本分となせども、更に進みて此れが説明を求めむとする要求起らざるを得ず。是即ち已に深く認識論に入れるものなり。

其他、道德的并に宗教的感情の説、及び意志現象の論の如きも、直ちに道德律の基礎の研究、及び意志自由の問題に入らしむるなり。然れども、此の點に於ては先づ凡ての哲學說を顧ることなく、専ら精密に其の心理的事實

をのみ研究し確定する事甚だ重要なり。而してかくする時、已に其の中に問題の解決を含む事多し。故に心理學者も單に事實を研究し確定するのみならず、更に一步を進めて大に研究するの勇あらざるべからず。

要するに現今の事情よりいへば、心理學は明に獨立せる一科の科學にして、同時に哲學研究に缺くべからざる基礎を與ふるものなり。

第五章 論理學の對象及び問題

論理學は正しき思惟の形式を研究する學なり。正しき思惟とは、それが客觀的に確實なる斷定に導くものをいふ。客觀的に確實なりとは、第一には、第三者が同じ徑路を取りて考ふる時は、必らず之を眞なりと認めざるを得ざるが如き斷定をいひ、第二には、其のいふ所が必らず事實と吻合し來るが如き斷定をいふ。

此の客觀的確實性に對して主觀的確實性あり。こは多くは、必らずしも

他人には、しか斷定せしむるを得ざるが如きものなり。例へば、多年相識れる朋友某は、云々の場合には云々の行爲をなすべく、決して其以外の行爲をなすことなしと信ずるが如きは、主觀的確實性を有するものなり。之に反して、晴雨計の上昇は氣壓の増加を示すといふが如きは、客觀的確實性を有するものゝ例なり。

此の如く、正しき思惟の形式は、客觀的に確實なる斷定に導くものなれば、其の形式は即ち客觀的確實性の普遍的條件に外ならず。然れども科學的研究は、必らず客觀的に確實なる結果を得といふに、必ずしも多少蓋然的なる斷定に導く事、亦少からず。故に論理學は、客觀的確實性、并に蓋然性の普遍的條件を研究する學なりと定義するを得べし。

抑正しき思惟の形式を發見せむ爲めには、先づ第一に思惟一般の形式即ち如何なるものが凡ての思惟活動に共通するかを討究せざるべからず。

此の場合に於て初めに表はれ來るものは、凡ての思惟作用の基礎に存する斷定形式なり。即ち最も單純なる知覺にても、又最も深く熟慮せる結果に

ても皆同じく断定の形式によつて顯はさるゝものなり。而して此の如き思惟形式は、言語に於ては叙事命題の形を取るを以て、命題并に断定或は断定命題は論理學研究の中心をなす。故に如何なる場合に、断定は其の形式上正しきを得るか、又如何なる條件あれば、一個若くは一個以上の正しき断定より新なる正しき断定を推理するを得るか。如上の場合と條件との研究が、即ち論理學の主なる對象なり。従つて論理學は、又正しき断定の普遍的條件を研究する學なりとも定義するを得べし。

然れども、此の如き普遍的條件は、必ずしも凡ての断定に存するにはあらず。断定の中には、個人の知覺記憶及び豫想を形式的に言顯はすもの甚だ多く、此等は所謂直觀断定にして、主觀的確實性を有するに過ぎざれば、論理的論證に資する所なし。之に反して、論理的論證を施し得べき断定は、個人的規定、個人的色彩を有する事實を表はすものにあらずして、自然活動の法則を言顯はすが如き普遍的立言をなすものに限る。此の種の断定は、之を概念断定と稱すべきものにして、論理的論證の對象たるものなり。

此の如き論證をして最も有效ならしめむには、已に二千年以上も古く傳はれる如く、概念断定を人爲的に其の要素に分解するにあり。茲にいふ要素とは即ち概念是なり。概念は断定中に入りて初めて其の働をなす所の思惟形式なれども、論理學に於ては其の目的上之を獨立せるものと見做さざるべからず。

概念は其の特性として凡て普遍性を有す。元來、概念は數多の直觀断定の沈澱して生ぜるものなれば、其の數多の表象に共通せる性質及び状態を統一して所有するなり。而して此の概念は、言語の如き符號によりて意識中に保存せらるゝものにして、此の言語の精密なる意義、即ち概念の有する性質と状態とは、之を概念の内包と稱し、此の同じ内包を有する物は、凡て概念の外延をなす。古來より傳はれる論理學は断定を論證するに、断定は單に概念關係を言顯はせるものと見る方法のみを以てせり。故に概念を以て外延關係なりと見る方一層便利なるなり。蓋し外延關係は直觀的に表はすを得べく、又能く數學的形式を應用し得べければなり。之に反して内

包關係は常に抽象的なるものなるを以て、直觀的に表はすを得ざると共に、又數學的形式にも表はすこと能はざるなり。

此の故に、古來よりの論理學は全く外延的、論理學に過ぎず。従つて勉めて概念關係を研究し、其の何れが斷定中に表はるゝかを調査し、更に又一定の概念關係より、新なる概念關係を導出する方法を發見せむとせり。此の導出する方法を推○理○作用○といふ。故に此の論理學は分れて概○念○論○斷○定○論○及び推○理○論○の三部となる。

斷定を以て概念關係を言顯はせるものとなす説は、斷定活動の心理學的性質を味ませる事久し。此の説にては、斷定は必ず常に二の成素より成ると見るが故に、斷定の根本に存し、斷定によりて表はさるゝ過程の中には、此の二成素が分割せられずして包含せられ居る事を忘却せり。然れども此の斷定作用の心理學的意義、及び特に認識論的意義につきては、後章更に論ずべきも、唯茲に一言すべき事は、論理學が斷定を概念に分解する事は、若し其の分解にして論理學の目的に叶ひ得べくむば、必ずしも不正なる事

にあらずといふにあり。但し、かく學術上の目的を達する爲めに許す事が、同時に心理的活動の原始的、本質的性質を左右し得といふにあらざること、を忘るべからず。

然れども此の如き概念斷定推理の研究のみを以て論理學の任務盡きたりといふべからず。進みて、此等の形式が科學的思惟中に如何に應用せられ得べきかを示し、且つ其に従つて研究の方法を探究せざるべからず。此れにつきてヴントが、己知の内容を叙述する方法と、研究の方法とを分ちたるは、吾人の大に倣ふべき事なり。叙述の方法には、概念の定義、及び分類并に論證の種類を含み、研究の方法には、歸納法と演繹法、分析と綜合、并に各科に於ける特殊の方法を論述するものとす。然れども此の方法論の價値は、其の説を特殊科學に應用し、其等に特有なる方法を研究する時、初めて現はれ来るものなり。故に之を普遍的、方法論と特殊的方法論との二に分ち、後者を以て特殊科學の論理學を述ぶるものとなすべし。ヴントは其の三卷の論理學中に、此の大なる問題を取扱ひ、以て論理學の任務をして擴張せ

第六章 論理學の發達及び學說

思惟の普遍的法則を定めむ事を要求せしは、紀元前四世紀の終頃にして、當時は一方に於ては、メガラ學派に屬する人々が斷定の可能性を疑ひ、他方に於ては、ソフィストが詭辯を以て對者を狼狽せしめむとせし時代なりき。是より以前、已にソクラテースは概念的認識を求め、プラトーンは概念の定義及び分類を研究したりしが、其の後アリストテレースは之を承けて精細に推理論證の法則を研究し、又之を論述して遂に論理學を成立せしめたり。アリストテレースは、論理學の任務は新なる眞理を發見するにはあらずして、唯、自然的思惟作用の結果を論證するにある事を信じ居たり。故に、氏は明に論理學は實際上已に得たる斷案の正しき事を論證するが爲めに、之を一定の形式に改造するを任務となすといへり。又氏は此の目的を達す

る爲めに、已に得たる斷案を分解して斷定となし、之を又概念的要素に分解すべき事を意識せり。故に氏が此の科學に與ふるに、分析學即ち分解術の名を以てせるは蓋し正當なりといふべし。

アリストテレースの論理學に關する諸論文(トピカの第八卷に存し、範疇即ち根本概念論、斷定命題論、推理及び論證論、蓋然性論證論、及び定義論是なり)は其の死後編纂せられて、オルガノン(思惟の機關)と命名せられたり。新プラトーン學派の人ボルフィウス(三世紀頃)之を拔萃して一書を製し、ポエーチウス(六世紀頃)之を拉典語に譯し、イサゴード(入門)と名づけて、中世紀の學校に於ては一般に教科書として用ひられたり。又アリストテレースの弟子、テオプラスト、及びオイデモス、并にストア學派、其他、中世紀のスコラ哲學者等は推理の形式を改善し、又多くの術語を創造したり。而して論理學者は此等の術語を、迅速且つ正確に運用せざるべからざりしなり。

十六世紀のスコラ哲學者にペトルス、ラームスあり。氏はアリストテレースの烈しき反對者なりしが、キケロ及びキンチリアンの說に従ひて論理

學教科書を著はし、其の材料配置の上に於て今日の論理學教科書の如くならしむる。

英國人ベーコンは、其の著『ノバム、オルガノン』(新機關)に於て、アリストテレスの論理學の價値なき事を曝露せんと勉め、又個物より普遍に至る歸納法を力説したりしが、今日猶アリストテレススコラ哲學者の論理學は、其の主要なる説を學校教育の一科中に殘し、未だ其の大部分を失はざるを見る。

然れども論理學は、其の後カントによりて、新なる學說と内容とを與へられたり。カントは古き純粹形式的論理學を認めたりしが、此の外更に新なる一種の論理學的觀察を創唱し、之を先驗的論理學と稱したり。氏は斷定の形式中には、悟性の根本作用存し、外部より入來る印象を整理し、且つ之に形式を與ふと信じたり。而して氏は、此の根本作用を以て、吾人の精神に固有なるものとなし、自然界の作用活動が規則的に整齊せるは、即ち此の根本作用によりて創造せらるゝものなりと主張せり。故に此の説によりて論

理的形式は生産的創造的勢力を得たるなり。ヘーゲルは此の思想を更に一方に發展せしめて形而上學的論理學を建設せり。此の説に於ては、概念の論理的自己發展は、直ちに現實界の作用活動、即ち事物の實在と全く一致すとなせり。ヘーゲルの此の辨證法は、深き影響を與へたるものなりしが、其の論理學は十九世紀の後半に於ては全く地に墜ち、更に現今に於ては再び他の形を取つて復活するに至れり。此と共に中世紀のスコラ哲學者の論理學も亦再び有力なる味方を得るに至れり。此等の潮流に對して、更に論理的法則が嚴密なる經驗的特質を有する點を重むる意見行はれむとす。故に現代の論理學に於ては、大要次の如き學說に區別するを得べきが如し。

一、心理學的論理學。こは思惟法則の心理學的基礎を精密に研究するものなり。此の研究は、事實的思惟を出發點となすが故に、思惟の心理學的探究に寄與する所甚だ多く、以て思惟過程の性質を事實的に明にせり。此の學說を奉ずる者は、論理的法則は普遍確實なる經驗の沈澱せるものと解す。

著者も亦此の考を有する者なり。故に此の説によれば、論理學の任務は、個々の經驗中に、幾何の普遍確實なる經驗の含まるゝかを研究する事となる。

二、認識論的論理學。これは認識の範圍内に於て思惟法則の確實なる事を定め、更に進みて認識の及ぶ限界をも規定せむと勉むるものなり。其の結果、此の論理學は特殊の論理學的問題の範圍を超出して、深く認識批判論及び形而上學の問題に入る。従つて此の種の研究は、甚だ重要なものなれども、客觀的確實性の普遍的條件を得むとする論理學の特別の目的を達すること尠し。蓋し其の研究は餘りに深く入りて、客觀的確實性に對する信仰を動搖せしむるものなればなり。

三、數學的論理學。これは斷定及び推理の形式を能ふ限り精密に數學的形式に表はさむと勉むるものなり。此の種の研究は、全く概念の外延關係に基くものにして、屢驚くべき結果を出せり。故に是れが爲めに古來よりの法則の甚だ簡單にせられ、精密に解せられたるもの少からず。此の如くして得たる形式の中、簡單なるものは、論理學教授に甚だ有要なれども、其の複

雜なるものに至りては、専門家にも容易に解し得られざるが如きもの多し。然れども此によりて有望なる活動方面の開拓せられたるは多とすべきなり。

四、方法論的論理學。これは論理的研究の領域を擴張せる事甚だ大なるものなり。ジョン、スチヤート、ミルの歸納的論理學の體系及び既に述べたるウエルヘルム、グントの大計畫の著述は、已に大なる影響を與へたり。近來、米國の思想家が論理學を経験的實際的基礎の上に建設せむとする、注意すべき企も亦此の種類に屬するものなり。而して此の企は、後に述べべき實用論の原理に基きたるものにして、主としてジョン、デューワー并にマアク、ポールドウインの論文中に現はる。若し論理學を以て全然思惟の方法論なりとし、此處に更にエルンスト、マッハのいへる思惟經濟の概念を應用すれば、此の方面に於ては猶一層深く發展するを得べし。然らば論理學は思惟の普遍的經濟に外ならざるものとなりて、其の任務は、思惟方法が如何に發達して、漸次に經濟的となりしか、又更に經濟的になり得べきかを探究する事となるな

論理學はアリストテレース以來一步も進まず、又一步も退くを得ざりきといへるカントの言は、其の當時に於ても殆んど承認せられざりしが、今日に於ては殊に然りとす。アリストテレースの根本思想の多くは、今日初めて正しく了解せられ、評價せらるゝに至れるなり。但し問題を排列し、形式に表はず點に於ては、アリストテレースと異り、更に一層進歩せるもの甚だ多し。

第七章 文法學、論理學及び心理學

論理學は其の起原及び發達の經過に於て、文法學と關係せる事頗る密接なり。主辭と賓辭とを分ち、又實名詞、形容詞、動詞を分つ事等は、文法上の研究よりも、寧ろ論理學上の要求より來れるなり。蓋し思惟の法則は言語に顯はれたる所を分析して初めて得らるゝものなればなり。然れども、長さ

發達の間に、論理的研究と文法的研究と互に混淆して、多くの誤を惹起せる事も亦少からず。例へば、言語の意義は概念の内包と同一なりとし、又命題は斷定と同一なりとせしが爲めに、文法上の凡ての關係は同時に論理上の關係なりと信じ、或は又反對に、言語は論理的法則に従つて發達すと信ずるが如き是なり。

文法學は言語を組立つる法則を研究する學なり。而して此の法則は生理學的事情及び心理學的條件に従つて發展するが故に、文法學の基礎をなすものは、論理學にわらずして寧ろ生理學及び心理學なり。元來言語は表象思想、感情及び意志を發表せるものなれば、其の思ふ所を精密に言ひ、他のいへる事を精密に解し得ば、言語の目的は實現せられたるなり。其の主張が事實上果して正しきや否やの問題の如きは、全く關係せざるか、或は少くとも第二次に於て初めて考へらるゝに過ぎず。故に文法學は全然論理的基礎より脱して、心理學に基礎を置くべきなり。

之に反して、論理學は言語中に存する思想を利用し、言語の意味も亦必ら

ず當時の用法に基き居らざるべからず。由來論理學上の練習は、確かに言語的發表を正しくするに效ありと雖、論理學は決して言語を支配し得べきものにあらざればなり。論理學は唯思惟の形式を取扱ひ、又其より生ずる關係を其の對象となすのみ。或は論理學は言語を利用して案内者となすこと多しと雖、決してこれが爲めに迷はざるべきにあらざるなり。

論理學と心理學との關係は、已にいへる所より明にし得べし。即ち心理學は思惟作用を以て他の精神活動と同じく、其の事實的經過の方面より研究せむとす。故に論理學者は此の方面に於ける心理學の結果を熟知せざるべからず。

若夫れ思惟の自然の形式を人爲的に變形し、以て客觀的確實性の普遍的條件に適へるや否やを論證し易からしむるが如きは、論理學にありては全く自由にして、而かも論理學本來の任務とする所なり。

心理學者よりいへば、斷定を下す時の事情之を下す人、補助思想、及び其の實際働ける目的等は甚だ重要なものなれども、論理學者は唯斷定、殊に其の

概念關係を注意するに過ぎず。即ち論理學者は或る思想が形式上果して正しきや否やを論證するが爲めに、其の思想を凡ての聯想、凡ての感情要素、其の人の目的、及び出來得べくむば其の人の人格より脱せしめざるべからず。論理學者にして、若し精密に又完全に、凡ての偶發的事情を捨象し得ば、其れ丈け論理學の任務を果たせるなり。茲に注意すべきは、かくの如くして得たる人爲的結果が、直に眞の生命ある原始的の思惟其者なるが如く誤認すべからざる事是なり。

論理學の任務を精細に確定せむ事は甚だ困難なる問題なり。此の困難の爲めに、特殊の論理學的問題以上に出で、一層高き問題に入ること多し。茲に於て論理學と哲學との關係生じ來る。

第八章 論理學と哲學

論理學は一般に哲學研究に缺くべからざる準備なりと認められ、學校教

育に於て哲學の豫備學科として授けらるゝ事多し。然れども論理學は單に哲學の豫備たるのみならず、凡ての科學に對して缺くべからざる豫備をなすものなり。メフィストが戯れに言ひたるが如く、論理學は人の精神を苦しむるものにあらずして、寧ろ周密なる思慮を養ひ、忽卒なる概括を誠しめ、確實性と蓋然性とを峻別する習慣を養成せしむるものなり。即ち論理學は、吾人が本能的に用ひ來れる思惟法則を意識し、其の思惟の結果を細心に檢するに至らしむるなり。此の如き練習は凡ての科學的研究に缺くべからざるものなり。

然れども論理學的問題を深く研究する時は、必らず純粹論理學的問題の範圍を超出して、嚴密なる哲學的研究に進入せざるを得ざるべし。若し概念論に於て、概念と其の徵表との關係を明かにせむとし、又斷定及び推理の應用範圍を檢せむとせば、吾人の悟性は一般に如何なる範圍まで實際を認識し得る能力ありやの問題に入らざるを得ざればなり。

是に於てか認識の可能及び起原に關する問題起り來るを以て、已に哲學

科中にて最も重要なものゝ一たる認識論中に入れるなり。然れども認識の問題は、最も密接に認識の對象たる實在の問題に關係するが故に、論理學は、遂に此の點に於て人をして本體論中に入らしむるものなり。

哲學
 哲學を造る多くの人は
 中等教育終了者或は
 現に受けつゝあるものなり。
 然るにその人の中に、道徳
 を重視する否、図書館に
 入る資格なきもの否
 紳士あるも。

多くの人の爲悲しむるを得ず

あ、!!
 人間としての價値を以て
 昭和四年十月

1921. 6. 22.

Tuesday.

K. I.

欠

敬請留意

公德心 相者 行為也

(4枚 切 盜也)

同業 報 並 德 實 現 也 又

其 以 行 爲 也

1919. 6. 20. Sunday

K. I 生

欠

認識の科學的意義も亦此の通俗の用法と全く異なるにはあらず。

用法に於ては、認識は唯感官知覺に基くのみにあらずして、更に之を思ひに修整するの必要缺くべからざることを明に意識するにあり。而して科學的研究に於ても、認識の對象の獨立存在は自明の假定として承認せらる。感官知覺及び斷定活動を精細に研究せる心理學の示す所によれば、認識活動と其の對象との間の關係は、決して單純なるものにあらず。常識よりいへば、吾人の表象及び斷定は、表象され、斷定されたる過程の模像なれども、深く考ふる時は、此の解釋は正當ならざるのみならず、寧ろ不可能なるものなり。何となれば吾人の表象及び斷定は、感官を超越せる心理的過程なるが故に、感官によりて知覺せらるゝ物の模像たるを得ざればなり。即ち吾人の表象及び斷定は模像たるにあらずして、唯吾人より獨立に起る過程の符徴たるに過ぎざるなり。是に於てか、表象及び斷定の如き符徴中に起る變化は、同時に其の對象たる實際の物に於ける變化を示すものなりや否やの問題生じ來る。但し此の問題に對する解答は甚だ困難なり。何となれば

ば吾人の表象及び斷定は、單に吾人の周圍によりてのみ規定せられ得るものにあらざればなり。心理學のいふ所によれば、表象及び斷定を作るには其の人の性質體制等の如き心理的并に物理的條件の關係する所大なればなり。例へば熱病を煩ふ時は、現實的には存在せざる種々なる形像を見るが如き、又は吾人の想像力は知覺せる要素を結合して外界に存せざる所の新なる心像を作るが如き是なり。故に吾人の知覺が幻覺若くは夢にあらざるや否やは、何人も、凡ての場合に於て斷言するを得ざるべく、又吾人の記憶心像中に幾何の想像要素の混入せしやは、何人も之を決定するを得ざるべし。然り、吾人の所謂認識は全く吾人自身の經驗のみ。従つて吾人は之に基きて自己の意識状態及び意識内容の變化を云爲するを得れども、吾人より獨立的に活動する過程につきては、全く何事をも立言する權利なきなり。此の問題は早晚必ず起り來るべきものにして、此よりして哲學上の認識問題は生じ來るなり。

此の問題は單言すれば、之を認識の可能及び限界に關する問題と

得べし。認識批判論は即ち之を研究するものにして、理論的哲學中にて最も困難にして、同時に最も重要な部分をなすものとす。

之と等しく認識の起原及び發達に關する問題も亦重要なものなり。

此の處に於ては、特に認識の成立に際し、感官知覺并に思惟作用がなす協力を規定す。例へば世界觀念を得るは感官のみによるか、物の眞の本質を解するものは悟性のみなるか、或は認識の生ずるは第一次、第二次、第三次の心理的現象の共働するによるか、等の問題の如き、又は感情現象并に意志現象の協力を規定し、特に認識に於ける言語の意義を研究する問題の如き是なり。而して是等の問題は凡て認識論の取扱ふ所なり。

第三章 認識批判論の發達及び學說

哲學思索をなさざりし人々より見れば、外圍の事物は凡て獨立に存在し、且つ彼等が知覺すると毫も異なるものにあらざるは、明白なる事實なりしな

り。此の考は哲學、否一般學術の未開以前に起れるものにして、少しも自己の認識機關を省みざる時代に存し、現時に於ても猶多く行はるゝ考へ方なり。之を稱して素朴的實在論といふ。之を實在論と名づくる所以は、此の程度に於ける人々は、自ら知覺し表象せる外界を以て、獨立的に實在せるものと考ふるが故なり。又此の考は批判的熟慮の結果に成れるものにあらずして、唯明なる假定として、思惟及び行爲の基礎たらしむるものなれば、此の點に於て是れ素朴的實在論なり。蓋し其以上に知る所なければなり。

然れども素朴的實在論の立脚地は、少しく之を反省する時は、永く維持せられ得べきものにあらざるなり。已に吾人の日常遭遇する感覺錯誤の事實の如きは、吾人の感官知覺は決して絕對的確實性を有するものにあらざることを知らしむるなり。例へば斜に水中に入れたる棒は折れたるが如く見ゆるも、實際に於ては少しも曲れる所なきが如き、或は遠隔の地に於ける事物は實際よりも小さく見ゆるが如き、是等の經驗は早晚意識せらるべきものにして、是れが爲めに遂に吾人の感官は果して信頼するの價值*

3. 2. 1.

や否やを疑ふに至り、茲に哲學的反省起りて、他の正確なる認識の源泉を求めむとするに至るなり。此の際、亦極端に走りて餘りに感官の認識能力を輕視し、思惟能力を過重するの弊に陥る事あり。然れども、唯一つ確實なる事は、吾人の世界觀念の成立するには、二種の全く異なる要素の相働く事是なり。其の一は、吾人以外に獨立して固定的に存在するものにして、之を客觀的要素と名づく。其の二は、吾人の感覺、思惟、感情の如き所謂吾人自身にして、暫有的變化的性質を有するものなり。之を主觀的要素といふ。前にいへる素朴的實在論は、吾人が知覺し推論せる世界を以て全く客觀的なりと見るが故に、未だ主觀的要素の現はれ來らざるものなり。此の主觀的要素を認むる時初めて認識批判論起り來る。

認識批判論の發達は、第一に味、寒、暖及び色彩の如き感官印象は、單に主觀的なるものに過ぎずと認識するに始まる。然るに觸覺の資料は、永く其の客觀的確實性を維持したりき。最近に至りて初めて剛柔圓尖の如きも、固より香、聲、色と同一なる感覺資料なれば、等しく認識批判的に取扱はざるべ

からずといふに至れり。

思辨的精神の考へ出したる事物は、凡て客觀的に眞理なりと認められたるは、甚だ久しき間なりしが、其の後遂に抽象的思惟の結果中に、主觀的要素の働ける事を確定するに至れり。此の方面に於て、吾人の經驗をして可能ならしむる悟性の形式について研究を企てたるは、實にカントを以て嚆矢となす。吾人が感覺の複合を以て、獨立固定の事物なりとし、又は規則的に繼起せる作用活動を以て、固より結合せりと考ふるが如き、其の他種々なる事も、カントによれば、吾人の悟性に存する原始的にして更に還元するを得ざる性質に外ならざるなり。此等の根本形式は即ち範疇にして、吾人は之によりて外界より與へられたる渾沌たる内容に形式を與へ、依つて以て初めて經驗をして可能ならしむるを得るなり。故に吾人の世界觀念の中に、吾人に認識されるものは、凡て第一に感性的先天的形式たる時間、并に空間によりて規定され、次には悟性の範疇によりて規定されるなり。故に認識され經驗され得るものは、單に主觀的要素に過ぎざるなり。従つて經驗

中より主觀的要素を除き去りて殘る者は、全然認識するを得ざる、物其者に外ならず。此の如き物其者が吾人を離れて獨立に存在する事は、カントに取りては絶對的に確實にして疑ふべからざる事なれども、唯單に確實に存在すといふのみ。其以上いふを得ず。故に此の説に於ては、客觀的要素は確かに存在すれども、全然超認識的なりとなすなり。

然れどもカントが許せる物其者の存在については、其の後の哲學者は之を以て全く證明し得べからざるもの、否全く考へ得べからざるものとして放抛し去れり。而して此等の人々のいふ所によれば、存在といふも亦悟性の範疇に外ならざるなり。故に此の世界觀念は素朴的實在論と正反對に立つものにして、全く客觀的要素を捨てたるものなり。

思ふに吾人が外界に對して知覺し推論することの如き、或は科學研究の教ゆる事の如き、皆是れ吾人の意識内容をなすに過ぎず。故に若し吾人の意識を捨象し去れば、此と共に其の内容をなすものは凡て消失し、従つて全世界は消失し去るべし。されば天地、水陸、山谷等は悉く皆吾人の表象に過

ぎざるを知るべし。然るに、若し外界を以て吾人の意識以外に獨立に存在すと主張するが如きものあらば、當然其の主張は全く證明し得べからざる矛盾説たるに終るべし。

此の考へ方は素朴的實在論とは全く反對せるものにして、一般に之を觀念論と稱す。此の説にては、世界は全く吾人の意識内容に過ぎざるもの、或は少くとも意識内容たる限りに於てのみ認識さるゝものなりと主張す。然れども此の學說中にも區別すべき多くの種類ありて存せり。其の中に於て最も重要なものを、後に順次に説明せむも、先づ初めに茲に用ひらるる術語を説明し置くの要あり。

意識内容として興へられたるもの、若くは意識内容としてのみ觀察せらるゝものを、内含的といひ、意識を超越し意識より獨立に存在するものを、過境的若くは超意識的といふ。故に嚴密なる觀念論者は、内含的世界の存在を信ずるのみにして、過境的若くは超意識的世界の存在を承認せざるなり。過境的(*Transzendent*)と全く異なる意義を有せるものに、先驗的(*Transzendental*)

なる語あり。此はカントの好みて用ひし語なるが、氏の所謂先驗的なるものとは、凡て吾人の經驗によらずして、經驗以前即ち先天的に確定し居りて、吾人は之を經驗によらずして證明し得るものをいふ。故に氏の先驗的觀念論の主張する所によれば、感性并に悟性の根本形式なるものありて經驗以前に存在し、物其者が此の根本形式に觸發するによりて、茲に初めて經驗をして成立せしむるなり。然れども此の説は、物其者の超意識的過境的獨立存在を許す點に於ては尙實在論たるなり。又此の説にては、吾人が認識し得べきものは單に現象に過ぎずと説くが故に、或は之を唯象論とも稱す。之に反して、内含的觀念論は近來内含哲學と稱せらるゝものにして、外界の存在といふも、そは吾人の意識の内容なりといふに異ならずと主張す。従つて此の説は何等過境的超意識的のものゝ存在を許すことなし。若し之に反して、意識より獨立せる世界ありと主張する人あらば、そは世界を二重にするものにして、全く誤れる方法によれるものなりとなす。而して此の世界觀は吾人をして唯自己及び自己の意識内容のみを以て實在するも

のと認めしむるものなるが故に、之を唯我論とも稱す。

此の考を嚴密に守るものは、シュッペレームケ・フン、レクレーア・シューベルト、ゾルデルン等、所謂新カント學派の人々なり。

唯象論に類似せるものに所謂實證論あり。此の説の主張は、科學は凡ての事象を制御することを得むが爲めに、唯現象の法則的なる點のみを研究すべく、決して永久超認識的なる、凡ての實在の最後の基礎を顧るの要なしといふにあり。此の學説の創唱者は、オグギュスト、コント（一七九八—一八五七）にして、或る意味に於ては英國のジョン、スチュアート、ミル并に獨國のエルンスト、ライスの如きも其の後繼者なり。

此等の觀念論的學説に反對して、更に再び實在論表はれ來れり。吾人が到底素朴的實在論に留まるを得ざる事は、凡ての科學研究者の許さざるを得ざるものなれども、若し又吾人の世界觀念中にある主觀的要素を公平に判ずる時は、或る重大なる客觀的要素の殘留するものあるが故に、凡ての反抗あるにも拘らず、吾人より獨立に存在して、吾人の上に働く外界の存する

事を以て、證明し得べき事實なりと見、或は少くとも常識并に哲學的思惟に最も満足を與ふる假定なりと見るを得べし。此の認識批判的の考へ方を批判的實在論と稱す。

批判的實在論に於ける種々なる學説につきては、後章認識の起原問題を説明する所に於て論ずべければ、今は先づ觀念論の説を述べて之を批評すべし。

第四章 認識批判的觀念論

自己の周圍に存する外界は、其の人の表象に過ぎずとなす説、換言すれば吾人が知覺により、若くは思惟によりて認識すと信ずる事は、凡て其の儘外界に存するにはあらずして、唯吾人の意識内容としてのみ可能なるに過ぎずとなす説は、哲學思索をなさる人々に對しては、特に奇異なる説なるべし。即ち吾人の實際的世界觀にありては、吾人が見て理解するものは、凡て

實際に存在するものにして、或は之を知覺せざる間と雖、猶存在するものなる事は自明の假定たるものなればなり。

然れども多少歴史的發達を考ふる時は、稍外界を以て觀念性なりとする説を了解するを得べし。思ふに一の世界觀念の成立するに當つては、吾人の物理的并に心理的有機體は、單に受働的にのみ働くにあらずして、其の觀念をして成立せしむるものは、寧ろ外界刺激に對する有機體の反動、即ち有機體自身の活動に外ならざるなり。故に經驗の成立するには、吾人の肉體的并に精神的體制の寄與する所甚だ多きを見る。若し之に付きて少しく心理學的分析を施さむか、更に一層明瞭に之を解するを得べし。

例へば今予が用ひつゝある机を觀察するとせよ。素朴的實在論よりいへば此は四角にして、黄色なる木板より成り、四個の脚の上に位するものといふべし。然るに若し更に詳しく此の知覺の一々を検する時は、先づ第一に其の色彩は予の感覺として存するものに過ぎざるべく、又其の形は眼球の網膜感覺及び筋肉感覺の複合して初めて知らるゝものなるべく、更に其

の堅硬并に平滑は、嚴密にいへば、觸覺上の性質に外ならざるものなるべし。此故に、初めは全然客觀的に存在せし机も、遂に全く主觀的なる感覺上の性質の複合に過ぎざるものとなり終るなり。是に於てか、此の如き複合は如何なる範圍まで一個の事物として吾人に現はるゝやの問題起り來る。勿論此の事物といふは、今いへるが如く、其の性質が全く感覺上の性質に過ぎざるものをいふ。今若し机より其の色彩、堅さ及び滑さを除きて、其の殘る所は何ぞやと問はば、何人も必らず狼狽して答ふる所を知らざるべし。故に若し此の如き感覺の複合が組織せられて一個の統一的事物となるは、全く吾人の心理的體制に基く事を知れば、然らば一個の机は實際上純粹なる現象、即ち意識内容たるに過ぎざるを知り得べし。故に之を以て吾人の意識より全然獨立に存在するものなりとは主張する能はざるなり。

同様の方法によりて、進みて周圍に於ける凡ての事物は、我が體中の或る體制によりて綜合せられて、一の統一體となれる感覺の複合に過ぎざる事を證明し得べし。

或は茲に主觀と客觀とを截然區別せむが爲めに、下の如き物理學上の發見を利用せむとするものあらむも、こも亦嚴密なる觀念論者に取りては何等益する所なかるべし。通常吾人が光として感覺するものは、實際に於てはエーテルの振動に過ぎざるべく、又音と稱するものは空氣の振動に外ならず。されば色及び音は、唯主觀的のみにみ存在するものなりと雖、物理學が認めて以て感覺の客觀的原因となす振動こそは、實に吾人の耳目より獨立に存在するものなれといふを得べし。然れども觀念論者は答へて曰はむ。空氣及びエーテルの振動も亦常に特別なる場合に知覺せられ得る主觀的振動ならむのみ。故に茲に於ても、決して主觀的要素の驅除せらるゝ事なく、其の所謂感覺の客觀的原因も亦同じく意識内容に外ならざるを知り得べしと。

然れども此の振動の因果的性質につきては一種特別なる事情あり。吾人の耳目は、遠方不至の處に働く感官なるが故に、此の耳目によりて吾人よりも多少隔りて起れる過程を認識するを得といふを常とす。然れども若

し感官知覺を以て振動の結果なりと解し、而して其の振動が感官に達し、其の結果、感官と一種の接觸をなして感覺となるものとする時は、此の感覺も亦純粹に觸覺の性質を有すと見るを得るなり。之によりて耳目は、外見上離れて働くが如きも、實際に於ては皮膚と同じく、觸官となりて直接に接觸して初めて其の作用をなすに外ならざるを知る。故に古來觸官は直接に物體を捕捉する器官にして、最も確實なるものと信ぜられ、今日にても猶多くの人々によりて、しか信ぜらるゝと雖、觀念論が觸官の資料も、亦其自ら他の感覺の資料と同じく、主觀的性質を有すと主張するは、決して不當なる説にあらざるなり。

故に吾人の認識より全然主觀的要素を除き去らむは全く不可能の事に屬すべく、更に又客觀的原因と主觀的結果とを區別せしむるが如き場合にも、所謂客觀的原因は又意識内容として與へられたるものに外ならざる事を顯はすべし。

又嚴密なる觀念論は、現代に於ける感官の生理學的研究によりて、確なる

根柢を與へられたり。ヨハンネス、ミューラーは彼の有名なる知覺神經の特殊作用の法則を説いて、知覺神經を如何に刺戟するも、常に同一の感覺を起す事實を明にせり。

例へば視覺神經を刺戟するに壓力を以てするも、或は電流を以てするも、常に光によりて刺戟せられたると同じく、唯色彩感覺を起すのみ。故に此の法則よりいへば、假令感覺生ずればとて、其の原因は客觀的に存する對象なるか、或は知覺神經中に起れる何等かの過程なるかは一見直ちに明なるにはあらず。

此の如く、吾人が一個人として外界に對立する限りは、外界は全然吾人の意識内容に外ならざる事は争ふべからざる事實なり。故に吾人によりて知覺せらるゝ物の存在 (esse) は、全く其が知覺せらるゝこと (percipi) に過ぎず。パークレー曾て esse = percipi の如く、簡單明瞭に觀念論の立脚地を立言せり。従つて過境的超意識的世界の存在を假定するが如きは、全く獨斷無用にして證明し得べからざる事なり。ヘルムホルツ并にマイネルトの如き有名

なる自然研究者、及び又或る意味に於てはマッハの如きも、科學は現象中に於ける法則の探究を以て満足せざるべからず、凡ての過程の客觀的性質は之を證明すること能はずと主張せり。殊にマイネルトは、外界を觀念性なりと思惟し得る事を以て、思惟能力の證なりとすら言へり。

吾人は更に進みて此の主張の正否を檢せん。

第五章 認識批判的觀念論の評價

二千年以上も研究して漸く達せる學說、即ち知覺せらるゝ事物の存在は其が知覺せらるゝ事に存す (パークレー) となし、或は世界は自己の表象なり (シッペンハウエル) となす者は、深く人類認識の性質を明瞭にし、又其の應用範圍を規定し得たり。抑感覺錯誤の事實は、古代に於て已に感官の信賴するに足るや否やを疑はしめ、其の結果、抽象的思惟の提出する所を以て、客觀的確實性ありとなすに至れるなり。次でパークレー、ヒューム及びカント等

によりて、吾人の思惟形式の主觀的性質は明にせられ、之を基礎として現象は認識的なれども、現象の根柢に存する物其者は超認識的なりとせられたり。

認識批判論の結果は、此の點迄は躊躇なく承認せられざるべからず。然れども、此の如く抽象的にして甚だ新奇なる思想に於て起り易き誤解を防がむが爲めには、先づ假象と現象とを精密に區別し置くを要す。

假象とは、不正なる斷定に導く表象を作らしむる原因をいふ。故に茲に主としていふべき感官假象は、事物によりて感官に起され、而かも誤れる斷定に導くべき外的印象なり。而して誤れる斷定とは、後より更に知覺し熟慮して訂正さるゝ場合、若くは假象によりて或る斷定をなす時の豫想が、遂に實現する事なき場合をいふ。次の例によりて之を説明すべし。

水中に斜に挿入せる棒は、吾人の眼には折れたりと見ゆるが故に、棒は屈曲せりと斷定せしむ。されど若し之を引出す時は依然として眞直なるが故に、今は屈曲せずと斷定せざるを得ず。然れども此の際水が棒を折らず

とも限らざるが故に、特に水中に入れる棒に觸れて之を検する時は、水中にありても觸覺上、棒の屈曲せる事を信ずるを得ずと知り得べし。吾人は此の如くして觸覺より來る斷定を甚だ信用するを以て、斷定して曰く、棒は折れたるにあらずして、唯屈曲せるが如くに見ゆるのみと。若し吾人にして光線屈折の法則を知らば、此の屈曲の假象は十分之を理解し得て、此の事實は確定すべし。故に其の後此の如き場合に遭遇するも、決して再び其の斷定を誤ることなかるべし。

是よりも猶一層複雑なる場合は、天體の假象的運動是なり。何人も皆太陽は靜止し、地球のみ運動するものなる事を知るも、實際上見る所にては、太陽は日々出沒し、地球は運行することなし。故に吾人の斷定は、多く此の假象に基きてなざる。然れども決して此が爲めにコペルニクスの世界觀に對する信仰を滅殺する事なし。蓋し此の世界觀の確信は、知覺によりて生ずるにあらずして、全く避くべからざる熟慮の結果に成れるものなるが故に、時として假象の爲めに掩はるゝ事ありと雖、多少の教育あるものは此の

如く普通且つ明白なる假象の爲めに誤らるゝことなきなり。

次に現象は、此の假象とは全く異なる意味を有す。即ち現象とは吾人の感覺に現るゝが如き外界、廣くいへば吾人が思惟するが如き外界をいふなり。故に詳しくいへば、現象とは、第一次的變化的なる外的印象及び吾人の感官に顯はるゝ幻象をも含み、更に吾人の認識によりて達し得べき方面の外界をもいふ。一言にして盡せば、世界は吾人によりて認識せらるゝ限りは即ち現象たるなり。従つて現象は假象の如く吾人を誤るものにはあらず。而して此の現象なる語は、已に吾人の認識には制限の存する事を顯はせるものなり。

認識批判論の死命を制すべき問題は、吾人自ら認識する現象より出發して、其の現象の根柢に存在し、且つ認識せらるゝと否とに拘らず、常に吾人より獨立に存する本體の存在を結論し得るや否やにあり。カントは、今いへる現象なる概念を初めて十分に理解し、又吾人の認識機關を最も深く分析的に研究せし人なりしが、此の問題に對しては斷然肯定的斷案を與へたり。

カントは諸所に於て、物其者を以て單に思想に過ぎざるが如く取扱へることありしと雖、氏の最後の確信は、凡ての現象には其の根柢に必らず認識主觀より獨立せる眞の實在存すといふにありき。吾人の内部至深の感情も亦極力此の問題を否定する事に反對し、カントと同じく肯定的に斷定す。即ち若し或る對象を知覺する時は、吾人は一種の壓迫の加はるを見る。而して此の壓迫は、之を外的壓迫と見ざるを得ざるものなり。此の如き壓迫は、他の人々にも感ぜらるゝものなれば、従つて吾人の知覺する事物は、何人によりても知覺せられざる時は消失し去るものなりとは信ずるを得ざらしむるなり。

然るにも拘らず、已に前にいへるが如く、新カント學派の嚴密なる觀念論の議論には猶大なる論理的勢力あり。蓋し人と環象とが互に相對立して存在する間は、觀念論者が世界を以て意識内容に過ぎずとなす證明は、之を確實ならずとして拒むの餘地なければなり。是に於てか眞に矛盾なき世界觀を得ひと勉むる思想家の意識中には、暫時も忍び得ざる苦しき狀態生

と来る。即ち峻嚴なる論理學は、一步も超意識界に入ること許さざるに、内心に於ける感情は、外界を以て觀念性なりと見る事に満足するを欲せず。此の如き感情の矛盾は哲學者の到底忍ぶことを得ざるものなり。哲學者は、誤謬と感ずる事は、凡て同時に誤謬と證明し得ざるべからざればなり。是に於てか、他人の意識を観察するに至りて、初めて此の如き思惟と感情との間の堪ゆべからざる分裂を解する鍵鑰を得べし。

嚴密なる觀念論者よりいへば、其の周圍の同胞人も亦單に現象に過ぎざる事勿論なり。此の考は唯肉體を観察し居る間は、何等の困難あることなし。何となれば吾人の肉體は、外界の一部たるべきものなればなり。然れども一步進みて同胞の意識内容を觀察するに及むで種々の困難生じ来る。例へば友人某氏予を訪問し、予と對談しつゝありと思惟せよ。若し予が某氏を予の意識内容に外ならずとなす限りは、予は彼の出す語音を以て鐘聲等と同じとなし、單に彼の發音機關より出づる機械的結果に過ぎずと見ざるべからず。然るに若し予にして彼に答へ、又は彼の希望を満足せしむ

るが如きことあらば、已に是れ彼の言語中に心理的現象の現はるゝことを認むと自白せるものなり。是と共に予は、某氏には意識、即ち意識内容ある事を承認せるものなるが故に、即ち某氏は已に予より獨立に存在する本質なりと承認せられたるなり。故に嚴密にいへば、彼は已に予が有すると同じ生存の獨立を有するものなり。蓋し自ら意識内容を有するものは、何人と雖、全く他人の意識内容としてののみ生存するが如きことは、決してあり得べからざればなり。

こは猶次の如く考ふる時は一層明瞭とならむ。某氏は予の知らざる多くの實際的經驗を有す。故に若し予が某氏を以て予の意識内容たらしめむとせば、彼自身の意識を凡て否定するか、若くは少くとも凡ての彼の意識内容を、彼と共に予の意識中に包攝し盡さざるべからず。されど是全く不可能なり。何となれば、予にして最も明白にして疑ふべからざる事實を蔑視するにあらざる限りは、予は某氏の意識内容を知り盡せりとは主張することを得ざればなり。故に予は、直接に全然予の意識内容となるを得ざる

某氏の意識内容の存することを許さざるを得ざるなり。然るに某氏は予の意識内容たるを要す。是に於てか、予の意識内容をなす意識内容は、予の意識内容にあらざるといふが如き反論理的の結論生じ来る。

是によりて認識批判的觀念論は、嚴密に其の結論を求むれば、論理的誤謬に歸すべきを證明せられたるものにして、爲めに其の議論は信用を繋ぎ得ざるに至れるなり。若し或る世界觀にして、同胞を以て獨立せる意識中心を有せざる物質的機械に過ぎずとなすが如きことあらば、此の如き世界觀は現實を精確に現はせるものとして許さるゝこと能はざるものなり。

觀念論を主張せるバークレーの如きは、獨立に感覺し思惟する所の多くの精神を確定するを怪しまず、又未だ其の中に含まれたる不合理を意識するに至らざりしが、近時の觀念論者、例へばフオン、レクレアの如きは、十分に「同胞問題」の困難を意識し、時としては、此の問題は觀念論の立脚地よりは猶解決せられざることを自白せり。故に彼等は宇宙を内容となす如き集合意識を假定して自ら救はむとするに至れり。然れども此の如き假定は已

に是れ、認識批判論的にあらずして、凡ての經驗を超出せる高尚なる形而上學的過境的性質のものなる事いふまでもなし。又此の如き假定は、心理學上成立し得ざるものにして、殆んど解するを得べからざるものに屬す。かくの如く意識を有する同胞の存在の如き、疑ふべからざる事實を曖昧にし、或は最も大膽なる形而上學的假定によりてのみ説明せむと試むるが如き學説は、勿論人をして之を信ぜしむる力を失ひ、又其と共に哲學的價值をも失はざるを得ざるなり。

此の如く常識に矛盾し、又實際生活上觀念論者自身にすら猶實行し得ざるが如き考は、如何にして生ずるに至りしか。吾人は已に前に吾人の認識に於ける主觀的要素は漸次増大し、客觀的要素は常に縮少し、遂には全く驅除せらるゝに至る事をいひしが、こは下の如き事實より起るなり。即ち人類の凡ての衝動は、生命保存を促がす以上に發達する傾向を有するが故に、認識衝動も亦固より自己保存の衝動より生じたるものなれども、已に其れ以上に發達して、漸次理論的科學を建設するに至れるなり。更に又吾人の

有機體の凡ての機關及び機能は、過度の活動によりて、他の機關及び機能を犠牲として發達し、之によりて遂に全體に對する害を生ずるに至る。之を通常其の機關若くは機能の過度發達(肥大)と稱す。例へば、烈しき運動家にありては、或る筋肉が過度發達をなすことある等の如し。又認識、批判的觀念論も、此の點より觀察すれば、認識衝動の過度發達に外ならざるべし。此の如く認識機關及び其の他の精神的發達を阻害する不健全なる過度發達は、必らず之を退癒せしむべきなり。此故に、再び常識の考に歸り、世界并に其の中に住する人類は、共に認識主觀以外に獨立に存在する本質なりと見ること最も重要なり。而して此は即ち批判的實在論の立脚地なり。

第六章 批判的實在論

批判的實在論は常識の考に最も近き說なり。然れども素朴的實在論と異なる所は、何等の吟味なくしては、知覺したる世界の實在に對する信仰を許

さず、進むで他の反對論を打破りて此の信仰を樹立し、更に認識批判論の要求に應じて之を變更する點にありとす。

批判的實在論の立脚地よりいへば、自然及び人類意識中に於ける過程は、何れも客觀的に存在し、全然認識主觀に依らずして獨立に存在するものなり。故に吾人が客觀的確實性或は蓋然性を以て知覺し、若くは思惟的に認識するものは、凡て吾人より獨立せる客觀的要素と、吾人自身の物理的并に心理的體制とより生じたるものに外ならずとなす。而して吾人の感官の資料は、批判的實在論よりいふも亦現象に過ぎざれども、それは獨立に存在する或る實際的のもの、現象なりと見るなり。例へば、木葉は綠色なりとは、批判的實在論よりいへば、此の木葉は適當なる光の下にありては、人の眼に綠色の色彩感官を起さしむる性質を有すといふ意なり。綠色は、之を見る眼なくば全然内容なきものなれども、綠色の感覺を起すべき條件のみは、光及び色なくとも猶存在せり。而して此の條件は即ち客觀的に木葉に屬せるものなり。

批判的實在論は、素朴的實在論の如く、事物は凡て吾人に現はるゝが、如きものなりとは断定せずして、吾人に現はるゝ如きものにてありといふなり。換言すれば吾人に現るゝものは即ち實在の一方面なりとなすなり。吾人が知覺し、又思维的に認識するものは、吾人より獨立に起る實際的の作用活動の一方面に過ぎざれども、而かも亦吾人の達し得べく、同時に吾人に對して意義ある唯一の方面たるなり。此の如き過程が、他の有機體に如何に現はるゝやは全く明にするを得ざれども、是れ固より顧みるの要なし。此故に、カントのいへる「物其者は、全然超認識的なるにはあらで、寧ろ吾人の達し得べき方面を提供するものなり。而して進むで常に此が新なる方面を認識せしむべきは、即ち研究其者の任務なり。」

レントゲン光線は肉眼を以ては認識するを得ざれども、驚くべき作用によつて其の存在を知ることを得たり。此の如く自然界に存する勢力は、自己の作用によりて研究者に其の存在を知らしむるもの猶多かるべし。此を以て「物其者の新なる方面は漸次明となり來るべき筈なり。」

此の如く、吾人より獨立に存在する實在を認識し得ることは、果して可能なりや否やの問題につき、認識批判的觀念論は「否」と否定し、素朴的實在論は未だ之を以て其の攻究の問題となす程度に發達せず。之に反して批判的實在論は深く反對説を検して後斷乎として「然り」と肯定す。客觀的認識の可能を否定するものは、認識起原の問題を生ぜしむる事なしと雖、之を肯定するものは、已に前章に於て認識論の對象として論ぜる諸問題を取扱ふに至るべし。

第七章 認識論の發達及び學說

認識論の任務は、認識の起原及び發達を攻究し、更に複雑なる認識過程を組織する要素的過程を規定するにあり。

前の認識批判論と異なる所は、批判論は認識の可能を問題とすれども、此の認識論にありては、認識の事實を假定して、其の發達及び法則を研究し、又他

の精神作用との關係を明にせむと勉むる點にあり。然れども又兩者は認識の限界に關する問題を共通に有するが如く、互に一致せる點も甚だ多し。故に此の兩者は合せられて一科となるを常とす。されど之を分ちて論ずる時は、認識に關する問題を解し易からしむるの便益あり。

哲學史上に於ては、認識論は認識批判論よりも後れて表はれたり。エレア學派及び其の後の原子論者(紀元前五世紀頃)は、已に感官の認識能力を否定し、又かのキレーネ學派(紀元前四世紀頃)の如きは、更に一層鋭く之を批判し、殆んど唯象論を唱導するに至りし程なりしも、何れも猶未だ認識の起原を説明せむとはなさざりき。之に反して、認識の起原及び發達を説明せむと企てたりと稱し得べきは、實にアリストテレースを以て始めとなす。されど其の方法は、唯概括的方法たるに止まりき。其の後ストア學派に於ても、認識の起原を研究し、又眞理の標準を問題となせり。

然れども、科學的認識論の成立せるは、漸く近世に入りてなりき。此の點に於ては、ジョン・ロック(一六三二—一七〇四)最も大なる刺戟を與へ、次でバーク

レー・ヒュームは更に之を發達せしめしが、遂にカントに至りて、如何なる時代にも認識論的研究の必要缺くべからざる事を明にして、斯學建設の基礎を定めたりき。

「純粹理性批判」に於て、カントは認識の源泉を二種に峻別したりしが、此は殆んど心理學的事實を脱せる程なりき。此の所謂二種とは感性及び悟性是なり。かく二種に分つことは、認識論の主要なる學說の分るゝ基なり。

認識の起原は何處にありやにつきては、二種の異なる解釋を與へ得べし。其の一は、感官を以て最も重要なる、而かも唯一の認識源泉となすものにして、之を感覺論と稱す。其の二は、正確なる認識は唯抽象的なる概念的思惟によりて得べく、感官は單に渾沌錯雜の印象を與ふるに過ぎずとなすものにして、之を通常唯理論といふ。然れども、此の名稱は多くは奇蹟を合理的に説明する事に適用せらるゝを以て、認識論上感覺論と對立するものゝ名稱としては、寧ろ主知論なる名稱を用ゆるを可とすべし。

かく一方にのみ偏せる學說の外に、漸次認識は知覺と思惟との共働によ

りて起るとなす説専ら行はるに至れり。此の折衷的學説は、獨り事實に適合するものなれども、猶未だ一定の名稱なし。蓋し此の中に異説甚だ多きが爲めなるべし。

以上説ける認識論に於ては、凡て人は其の外圍と相對立し、外部より來る刺激に反應するものとして、換言すれば個體としての人に就て、其の認識の起原及び發達を研究せむとするに過ぎざれども、現代の人類學の示す所によれば、認識を傳ふるにも、亦認識の成立するにも、社會的生活及び交通の影響すること頗る大なる事疑なし。特に言語に關しては、此の點は已に早くより知られ、從つて言語の認識論的意義は精細に研究せられたり。されど此の言語の外にも猶認識發達中に社會的要素の存することは明なれども、此の方面の科學的研究は猶未だ充分ならず。

第八章 感覺論

未だ哲學思索をなさざるもの、考は或る意味に於ては感覺論的なり。

即ち是等の人は、認識の最も正確なる源泉は、感官知覺なりと見るを以てなり。希臘語にて *oide* (予は知る) は、もと見るを意味するに等なる語幹の完了現在形なり。故に希臘人の考にては、知識とは元來見たと同一なるなり。猶此の通俗的解釋の興味ある例は、ホーマーがイリアス第二卷に於て、凡てのものを見、從つて凡てを知るムーゼの神に訴ふる所に存す。此の程度の思想の特色は、猶未だ知覺と思惟とを同一視し、思惟も亦感官知覺の一種なりと見る點に存せり。斯の如き考は古代の希臘哲學に於ても猶存在せし所なり。

然れども、哲學的意味に於ける感覺論は、感官を以て唯一の認識源泉なりとして悟性と對立せしめたる時、初めて表はれ來るなり。此の意味に於て、ソフィストたるプロタゴラス(紀元前四一一年に死す)は感覺論者にして、氏はエレア學派が感覺の確實性を非難せるに對して、感官知覺の對象の存在を斷定し、幾何學の定理にても、感官知覺と矛盾するが如きものは眞理にあら

ずとなせり。

近世に於て、ジョン・ロックは、凡ての經驗の感官によりて起る事を指摘して、再び感覺論を採用せり。されど氏は又内的知覺(反省)の存在を認めたるを以て、其の感覺論は已に純粹なるものにはあらざりき。更に近世哲學に於て、最も明なる感覺論を主張せる者は、佛國のコンディヤック(二七一五—一七八〇)なりとす。コンディヤックによれば、精神には唯一の能力存するのみ。即ち感覺の能力是なり。而して是より發達して、種々複雑なる思惟過程成ると主張せり。氏は其の學說を説明するに銅像の例を取り、漸次之に種々なる感官の附加せらるゝ事を巧に説明し、初めには嗅覺、次には觸覺來りて、以て外界の表象を生ずといへり。

其の後感覺論は、永き間、カント・フイテ・シェリング・ヘーゲル等の偉大なる主知論的體系の爲めに屏息せしめられしが、再び現代の科學及び哲學に於て較認めらるゝに至れり。是れ感官知覺が、凡ての經驗の最後の源泉なりとは、一般に信ぜらるゝ處なればなり。若しキルヒホッフ并にマッハのいふが如

く、科學の任務は、たゞ事實を記載するにありといひ、或はマッハの如く、科學は經驗が經濟的に組織せられたるものに過ぎずと説かば、或る意味に於て此の説は即ち感覺論なり。更に又記載するにも、又經濟的に組織するにも用ひらるゝ最も重要な方法たる數學も、亦其の最後の點に於ては、感官的直觀に歸すといはゞ、其の考は一層感覺論的なり。されど感覺論が物理的現象を觀察する範圍内に於て、感官知覺を以て凡ての經驗の最原始的なる源泉にして、又最後の裁決なりと見る點は正當なり。然れども感覺論は、一方に於ては、吾人自ら經驗する心理的現象を觀察するに、感官知覺の外に、等しく確實なる第二の經驗の源泉の存することを看過し、又他方に於ては、感官知覺中にも已に暗々裡に一層高尚にして複雑なる心理的現象の働き居るを意識することなし。

第九章 主知論

感覺錯誤の事實并に感官印象が人によりて相違せる事實は、早くより哲學者をして感官は純粹なる認識源泉にわらずと見るに至らしめたり。故に寧ろ感覺世界を脱して、内心に存する抽象的思惟によりて、初めて事物の眞の本質を確實に捕へ得と信じたり。従つて主知論は、已に古き時代に於て唱導せられたる所なり。

屢、いへるが如く、エレア學派は、感覺以外の思惟によりてのみ眞の世界を認識し得と信じたりしが、プラトーンも亦之を繼承して、靈魂が肉體中にあるは恰かも牢獄にゐると同じく、而してかく肉體と接して不淨化さるゝが故に、此の肉體性より全然脱却してこそ、初めて眞の認識を得べきなれと考へ居たり。

此のプラトーンの說に従ひて、聖アウグスチヌスは、吾人の精神が最も確實に知るものは、精神の前に存するものに若くはなく、而して其の前に存するものゝ中にて、精神其者ほど精神の前に存するもの他に之れなしといへり。次でデカルトは、此の思想を取りて凡ての哲學の基礎となし、自己の思

惟しつゝ、ある事を知るを以て、最も確實にして疑ふべからざる事實なりと主張せり。然れども、かく聖アウグスチヌスの主張及デカルトの格言 (Cogito, ergo sum) 中に含まれたる認識過程の主知論的の解釋は、コベルニクスの世界觀の承認せらるゝによりて發達せしめられたる所甚だ多し。此の世界觀を承認するものは、感官の證するが如く、地球は靜止し太陽のみ出沒すと考ふる事は、到底維持し得べき說にあらざる事を許さるべからず。又十七八世紀に盛なりし數學は、直觀的なる幾何學よりも直觀的ならざる算術を以て一層力あるものとなせしが、是亦認識源泉としては、抽象的思惟を以て感官の上に位せしむるに貢獻せる所尠からざりき。かくの如く確實にして疑ふべからざる數學的斷定の源泉は、當時何人も之を感官的直觀に求むることなく、一般には唯全然理性が自ら之を創造するものにして、而して其の理性は幻の如き現象に全く影響せられざるが故に、此の如き絶對的確實性を以て活動し得と信ぜられたり。

カント出で、初めて此の信仰の正否を問ひしが、是れ實に氏の不朽の功

續なり。「純粹數學は如何にして可能なりや」とは、氏が問ひたる所なりしが、其の答は全然主知論的に出でたるにはあらずき。カントは、感官は認識の材料を供給し、之によりて初めて悟性をして其の先天的機能を活動せしむと確信せり。然れども、認識の成立するは、悟性が感官の供給せる材料に形式を與ふるによる。即ち悟性は自然をして自己の法則に従はしめ、之によりてカントの所謂自然に對する立法者となるなり。更に氏は一步を進めて、悟性は其の根本概念即ち範疇によつて直觀的基礎以上に出で、活動する權利ありとなし、此の直觀的基礎なくとも、猶客觀の思想は、常に主觀が理性を用ゆる上に眞に效果ある影響を與へ得といへり。此の如くカントは悟性に與ふるに部分的全權を以てせしが、次でヘーゲル出て、更に進みて知性は單に立法者たるに止まらずして、正に自然の創造者なりとなすに至れり。故にヘーゲルよりいへば、世界の本質は精神的にして、從つて吾人の概念は其の辨證法的發展に於て、直に世界の作用活動を表はせるなり。此の説を以て主知論は其の絶頂に達せるなり。而して吾人の思惟は、其

の材料的基礎たる感官知覺と全く相離れたるなり。故に吾人の考は再び感覺論に歸らざるを得ざるは蓋し自然の數なり。

主知論の正しき點は、凡ての感官知覺は悟性によりて整理せられ、依りて以て眞に有用なる認識が生ずる事を得といふ點にあり。此の如く感官知覺に形式を與へ、又互に關係せしむる思惟の活動は、長き間に多くの形式并に概念を作り、而して此等は、遂に吾人に固有なるものとなるに至れるなり。例へば、多くの性質を有する事物の概念、即ち實體と屬性の如き、或は凡ての活動に應用せらるゝ因果概念の如き是なり。故に吾人は此等の概念を以て、悟性の固有財産と見、先天的なりと考へ易し。然れども、先天的根本形式即ち範疇を假定する事は、甚だ誤解に導き易く、且つ甚だ不可解の點を含むが故に、此の如き假定よりも、寧ろ悟性が認識資料に形式を與ふる活動を發生的に分析し、其の形式の經驗的起原を發見することを務むべきなり。

然れども、發生的認識論を論述する以前に、簡單に猶他の主知論的學說の發達を述べべし。此の説は凡ての時代に流行し、今日に於て再び勢力を得

つゝあるものなり。こは高尚なる認識の神秘的源泉を探究するものにして即ち神祕論是なり。

X 第十章 神祕論

主知論的學說の依れる最後の基礎は、吾人の靈魂は、若し肉體的束縛より全然離脱するを得ば、純粹高尚にして絶對的に確實なる認識を得べしといふ假定にあり。かく靈魂が肉體より脱出すといふ思想は、常に宗教的觀念と結合し、以て深遠なる宗教的運動を惹起せり。

紀元前七世紀以來、希臘に行はれたるオルフホイスの一派は、其の輪廻轉生の教義、并に深き解脱の欲求によりて、神祕論を哲學的に建設する動機を與へたり。而して此の神秘的儀式、即ち密儀中に於ては、死後、精神をして解脱せしめむが爲めに、多くの方法と規則とを案出し、又神秘的教理を組織せり。又紀元一世紀に於て、希臘并に羅馬に於て大なる活動をなしたる新プラト

ーン學派、及び新ピタゴラス學派は神祕論を組織し、遂に之を以て一の哲學的體系となしたり。プロチン・ヤムブリクス、プロクルス等は其の有名なる代表者なり。次で中世紀に於ては、基督教的神祕論表はれて、三位一體處女の懷妊、來世存在の確信、及び苦行等の秘説を解するが爲めに、新なる深き認識源泉を得むと勉めたり。マイスター、エックハルト、ベルトホルト、フホン、レーゲンスブルグ、ヨハンネス、タウラー并に、後れてヤコーブ、ベニメ等は、其の狂熱的觀念を發表して強き感化を遺したりき。

近世に於ても神祕論は猶存續し、十八世紀の啓蒙思潮すら尙之を驅除し盡すを得ざりき。十九世紀の前後に於ては、神靈論の形式を取りて再び勢力を得、多くの信奉者を生じたり。神祕論は哲學的なる範圍に於ては、其の依る所は、特別なる事情の下に於て凡ての世間的束縛を脱せる純粹なる靈魂は、最高真理に接し、心眼を開きて神を見ることを得といふ思想にあり。是には通常烈しき感情の激發、即ち心理的力の高上及び集中を必要となす。而して此の高上及び集中は、吾人が凡ての世間性を捨て、全く神性に歸せ

る忘[○]我の如き、或る状態に於てのみ可能なりとす。此の方法によりて高上せる想像力は、一種獨特の心像を映現せしむるを得て、忘我に入れるものは其を實在せりと信じ、其の信者は又彼に倣つて之を信ずるなり。

神秘論の他の思想は魔法幻術に近きものにして、若し人にして心理的力を高上せしむれば、直接に靈鬼と交通することを得、感官の媒介なくして最高真理を天啓され得との信仰なり。此の種の神秘論は現今特に之を神靈論[○]といふ。多くは或る人のみ靈鬼と交通するの能力ありと信ぜられ、而して之をなす時には催眠的眠を以てするを常とす。然れども是には多くの詐欺の企行はれ、有名なる學者すらも猶賤しき手品師の犠牲となれるもの尠からず。

神秘論中に表はるゝ思想并に感情は、認識論及び形而上學の發達に深大なる影響を與へたりしが、哲學史家は猶未だ明に之を認めず。神と合一せむとする熱望は神秘論の特色にして、此は一元論的體系を組織するに寄與せる所甚だ多く、他方に於ては、實際にもわれ想像にもわれ、感情によりて吾

人の認識は明瞭となり得るを以て、之によりて感覺的并に悟性的認識の外に、猶一種の内觀[○]とも見るべき直覺的認識たる第三の認識を假定せしむるに至れるなり。カール、ヨエルは、曾て神秘論が古代イオニアの自然哲學、并に文藝復興期の思想家に影響せる事を指摘したりしが、猶スピノザ若くはカント・ヘーゲルに於てすら、甚だ神秘的なる部分存するを見る。

此の如き事實は、認識を心理學的に研究する人々に取りては、甚だ重要な事實なり。何となれば、之によりて認識は決して其自ら孤立的に存在するものにあらずして、他の精神的過程と密接に關係し、互に影響せらるゝ事を明にすればなり。更に進化論は此の思想を一層確證するが故に、漸次人類の認識は、固より其の生活の一部なること、又かく解して初めて明瞭に了解せられ得る事を明にせり。第十二章に論述すべき發生的生物學的認識論は此の確信に基くものなり。此の考と類似せる學說にして、近來米國の思想家によりて提出せられ、之に基きて認識過程の新なる解釋を建てたるものあり。之を「實用論」といふ。先づ次に此の學說を紹介し、而して後に、之

と密接に關係する吾人の解釋を叙述すべし。

第十一章 實用論

人類認識の批判的研究並に事物の根柢に對する形而上學的思辨が、遂に哲學をして漸次實世界を離れ、實生活に遠ざからしめたりとの考より出發して、十九世紀の終りに、米國の哲學者が從來と異なる觀察點に立たむとするに至れり。即ち彼等は曰く、理論的思惟は行爲に方向を示し、人生に新なる内容を與ふる爲めに、經驗的に活動せざるべからずと。此の如く思惟の實際的意義に注意を向けて、茲に新なる認識論生じ來れり。後に之を實用論と稱するに至りぬ。

此の新なる方法を開けるものはチャールズ・ピアースなり。氏は一八七八年に公にせる論文「吾人の觀念を明に理解すべき方法」中に於て、吾人の斷定并に確信は、吾人の行爲に對する規則に外ならざることを論じたり。故に

若し吾人にして或る思想の眞の意義と内容とを十分明瞭に了解せむと欲せば、此の思想が行爲に及ぼす結果を明にすることを勉めざるべからず。故に思想區別は、それが如何に微細なるも、何等か實際上の區別に制せられざる如きものあることなし。されば、何等實際上の効果を指摘するを得ざれば、其の思想は全然内容なきものにして、單に無意味に言語を結合せるもののみ。従つて一思想の實際的效果を了解することが、即ち其の思想の完全にして唯一なる意義を了解することなり。

此の如き根本思想より、方法としての實用論發展し、其の方法は主として二種の方面に應用せられたり。第一に、實用論は、或る問題にして之を解決するも、毫も實際生活に意味なきが如き問題を捨つる爲めに用ひられたり。實用論者は凡ての問題に對して、甲の解決には如何なる實際的效果ありや、又乙の答には如何なる實際的效果ありやを研究す。故に若し此の兩種の場合に於て、吾人は全く同一の態度に出でざるべからずとせば、そは已に問題たらざるなり。例へば外界は實在性なりや、或は觀念性なりやの問題の

如きは此の例なり。觀念論者と雖、外界に對して實在論者と全く同じ態度を取らざるを得ず。故に此の如き争は凡て實用論者に取りては意味もなく、又價值もなきものなり。之に反して、世界は神によりて創造せられたりや、或は純粹なる物質的過程より生じたるものなりやの問題の如きは、實生活に取りて甚だ大なる意義あり。何となれば、神を以て世界の創造者と見る場合と、物質が凡てのものを生じたりとなす場合とにては、世界は吾人に對して全く異なる關係とならざるを得ざればなり。故に實用論も此の問題につきては熟慮を回らさるべからず。

實用論が應用されし第二の範圍は、認識過程と真理の概念となり。元來實用論は、思惟を以て生活の一部一要素と解するを以て、此の解釋に従へば、斷定の真理なるべき事は、唯全く其の斷定より生ずる實際上の結果に繋るの外なし。即ち或る斷定が眞なりとは、其の斷定によりて生ずる活動力が生活に益あるものたるを表はす時をいふなり。單に事實を語るに過ぎざる純粹理論的真理の如きは、一般にいへば、存在することなし。蓋し思惟と

生活とは密接に關係するものなればなり。其の他凡ての時を通じ、凡ての思惟的生物に通ずる絶對的真理の如きも、其の存在を許し得べきものにあらず。何となれば、真理は一種活動的にして標準を與ふる性質を有するが故に、超時間的にあらずして、常に未來に向へるものなればなり。

此の如く真理概念に對する新なる解釋は、古くより固定せる思惟の習慣を破り、従つて多くの方面に於て烈しき反對を受けたり。就中、此の如く真理を實用論的に解することを拒むものは、古き形式論理學者并に數學者の如き是なり。蓋し論理學者及び數學者は、超時間的なる永恆の真理ありて、凡ての經驗に依らずして發見せられ、而して凡ての經驗に適合すと確信すればなり。故に最近十年の間に於て、實用論に對する論争攻撃が、英米の雜誌に表はれたるもの甚だ多く、又一九〇八年にハイデルベルヒにて開かれたる萬國哲學大會に於ても、此の新方法が盛なる議論の焦點となれり。而して此の説の或る點の如きは、今日猶未だ明白にせられざるものありと雖、其の根本に存する思想は、反對論者の議論によりて更に發展せしめらるべ

し。

次章に述ぶべき認識過程の發達史的觀察よりいへば、實用論は其が眞理概念を以て活動的に解釋する點に於て、甚だ正當なりといふべし。凡ての斷定に含まれたる印象の説明は、將來之を利用せむが爲めなり。然れども生活條件が益、複雑となるに従ひ、之れは應じて數、説明と利用との間に多少の時間を生じ來る。故に吾人は印象を説明し、此の説明を保持して將來の利用を俟つなり。されば吾人が斷定をなすは、即ち貯へむが爲めなりともいふべし。従つて知識とは、彼の有力なる實用論者の一人なる、オックスフォード大學教授シラーが、ハイデルベルヒに於ていへるが如く、手段にして同時に媒介たるに外ならず。此の如く、凡ての斷定、従つて凡ての科學は、皆其の最後に於ては利用を目的となすものなり。エルンスト、マッハも亦同一の意味の言を吐けり。然れども、此の説明と利用との間の時間の爲めに、古來傳はれる純粹理論的眞理の概念に類似せる形式を要するなり。而して此の形式は已に得たる説明を貯ふるものとして必要あるものなり。眞理の標

準は常に利用可能性によりて存するものなるが故に、此の利用可能性の條件を精密に定むる事は甚だ有要なる事に屬す。吾人は下に如何なる形式が最もよく此の目的に適するやを研究すべし。されど實用論は、事實を單純に説明するにも、亦此の如き形式の缺くべからざる事を承認せざるべからず。

要するに此の方法は全然正しき根本思想を含むと雖、猶深く之を發達せしむべき餘地あるものなり。

第十二章 發生的生物學的認識論

認識の生ずるは感官のみによるにあらず、又思惟のみによるにあらずして、實際に於ては實に此の兩作用の共働によるものなる事は、今日に於て一般に承認せらるゝ事實なり。是に於てか、此の兩種の認識源泉の部署は如何、又其の相互の關係は如何等の問題生じ來る。カントは曾て「内容なき概

念は空虚にして、概念なき直観は盲目なりといひしが、これは實に眞理の一面を表はせり。故に若し感官知覺にして未だ悟性の整理の加らざるものは、錯雜渾沌なるべく、又單に概念を抽象的に働かしむるのみなりせば、その資料的基礎を缺くが故に、事實上の承認を得難かるべし。従つて感官は認識に資料を供給し、悟性は之に形式を與ふるものなりといへば、大體に於て不正なるにわらずと雖、是れ猶餘りに概括的にして、充分精密なる説明たるを得ざるなり。

發生的觀察は認識過程を他の精神生活と關係せしめて研究し、以て認識論は決して認識作用を強いて感情并に意志との關係より分離せしむべきにわらずとするなり。換言すれば、認識論は心理學的基礎の上に建設せられざるべからずといふにあり。

更に猶注意すべきは、認識を得むとする衝動は生命保存の衝動より出づること是なり。元來人は外界に順應せざるべからざるものなるが故に、此の外圍の中にありて自己を保存し、且つ漸次外界を制せむと欲せば、外圍の

中如何なるものが自己の要するものなるかを知悉し、又其の現實的并に可能的勢力を理解し説明し得ざるべからず。此の點より考ふれば、凡ての科學は皆實際的要求より起れるものなるを知る。例へば、天文學は農業航海の爲めに發明せられ、又恐らくは歲時を精密に區分する爲めに發達せるものなるべく、幾何學は土地測量術として起り、算術は商業の爲めに組織せられたるものなるが如し。故に、實に必要はよく祈ることを教へ、又思惟することをも教へたりといふべし。而して認識衝動は、其の起るや直に發展して、直接の要求以上に、廣く且つ強く發達し、遂に只管活動せむ事をのみ望む機能要求となるを常とす。例へば、知識の爲めに知識を得むとする欲望の如きは此の如くして起り、窮理的驚愕の如き哲學の起原をなすものも、亦かくして起り來れるものなり。故に認識衝動は生物學的起原を有するものなることを忘るべからず。

又感官は資料を供給し、悟性は認識の形式を與ふとすれば、進んで此の形式を一層精しく規定するを要す。カントは悟性の根本形式を凡ての斷定

形式の研究によりて発見したりしが、此の形式は形式論理學が人為的に案出したるものなるを以て、事實上に起る斷定とは全く同一なるにはならず。故に正しくは一般斷定の形式を、其が實際に表はるゝ如く研究せざるべからず。蓋し凡ての認識は單純なる感官知覺にありても、或は甚だ複雑なる思想系列の結果にありても、必ず斷定の形式を以て考へられ、又言ひ顯はさるゝものなるを以てなり。

凡ての斷定活動中にて、本質的なるものは、決して通常考ふるが如く、概念の結合又は表象の聯合にあらざ。寧ろ斷定せらるべき過程は、已に一の統一的表象として其の斷定以前に存在し、而して其の表象の内容は此の斷定によりて一定の綜合及び分析を受く。然れども、之を受くるには其の過程は獨立に存在する一個の「力」の中心に關係し、此の「力」の中心の「力」の發表として表はさるゝが如き方法に於てす。例へば香しき薔薇は已に斷定以前に一の全體物として與へられ、而して「薔薇は香し」の斷定中に於て「薔薇は力」の中心にして、香しは力の發表なるが如し。即ち「力」の中心は主辭にして其の


發表は賓辭なり。

此の如き解釋は、若し吾人が此等の中に實際に表はるゝ普遍的なる心理的法則を發見せむと努むる時、一層明白となるべし。而して此の際表はるものは、凡ての人々に共通に存する一種の統覺に外ならず。統覺とは注意によりて喚起されたる表象性向に基きて、表象に形式を與へ、又之を同化する作用をいふ。例へば、或る對象に注意を集注する時は、其の對象は爲めに意識の視點に入り、而して類似接近の兩聯想の何れかによりて此の對象と結合せる凡ての表象は、此れが爲めに明晰となり來る。かくして覺醒せる表象は、其の對象を照らし、其の對象は之によりて新なる意義を得るに至るなり。

已に存する表象性向の中に於て、注意によりて最も容易に明晰となるものは、最もよく形成せられたるものにして、従つて其の人に於ては優勢なるものなり。故に同一なる事物にても、人によりて各異りたる表象の群を喚起す。換言すれば、各異なる方法によりて統覺せらるゝなり。最も容易に

fundamental apprehensions are translated from the language of sense into that of man

Ideal disposition



起さるゝ表象の群を、優勢なる統覺の一群と稱すべし。例へば、同一の森林に對しても、疲れたる旅人は木蔭を與ふる所と見、畫家は之に反して色の濃淡と樹木集合の所と考へ、工匠は又材木の大小質の強弱に注意し、樵夫は枝葉の繁茂せるや否やを注視し、獵夫は其の中に獸類の足迹を發見せむとするが如し。

此の如く同一物に對して種々多様に統覺し得べしと雖、亦凡ての活動を同一に解釋する一種の説明法、即ち一種の統覺存す。例へば小兒が物を壓せむとする時、抵抗を生ずるを以て、之を其の物の意志より出づる抵抗力となす場合の如き、此の際小兒は自己の意志衝動を外界の物に附與して、其の過程を意志の發現となすなり。即ち小兒は凡ての過程を統覺するに、之によりて最も強き表象性向を活動せしむる如くに統覺するなり。蓋し凡ての性向の中にて、身體運動によりて現出する意志衝動を生ずる性向の如く強大なるものあることなければなり。故に會て感じたる意志衝動を想起するも甚だ易く、而して此の想起が即ち優勢なる統覺の一群をなすものに

して、小兒は之を以て其の注意する過程に應用するなり。蓋し小兒に取りては、知覺せる事物は凡て精神を有する生物にして、又其の事物中に於て表はるゝものは、凡て其の事物の意志行爲と解せらるればなり。此の如く凡てに精神ありと見る生氣論的即ち擬人論的の考は、自然民族の間にも亦存するものなり。例へば水の流るゝ風の吹く、又は日月星辰の輝く等、凡て是等の過程は可視的若くは不可視的なる或者の意志の發現なりと解するが如し。此の如く外界に於ける凡ての過程を以て、獨立に存在する對象の意志發現なりと説明する統覺方法を、基本的統覺と名づくべし。

カントは其の「純粹理性批判」中に於て、再三統覺の綜合的原始的、即ち先驗的統一を論じ、統覺を以て、直觀せるものを自己意識の統一中に結合せしむる思惟の能力となせり。故に氏は「予は思惟す」の中には、予の凡ての表象を伴ひ得ざるべからずと云へり。又氏は、凡ての認識に於ける此の根本假定は、斷定作用中に活動すとなし、斷定とは與へられたる認識を、統覺の客觀的統一中に入るゝ方法に外ならずと云へり。故に氏によれば、先驗的統覺は

凡ての認識の根本形式并に根本條件にして、凡ての斷定中に表はるゝものなり。

此等の事に關しては、吾人はカントに従ひつゝも、而かも猶明に根本的に氏と異りて、凡ての認識の根本形式并に根本條件を、先驗的統覺と呼び、して基本的統覺と稱すべし。カントの考によれば、統覺の統一は凡ての經驗以前に與へられて、先驗的即ち先天的なりと雖、吾人の所謂基本的統覺に於ては、經驗は已に其の中に存在するなり。而かも其の經驗は、固より環象中にて發展し、且つ其の影響を受くる所の人類有機體の凡てが、必然的になさざるを得ざる經驗にして、又實際に於てなしつゝあるものをいふ。更に又カントは統覺の先驗的統一を以て表象を結合し、又之を自己意識中に入る所の普遍的形式的條件にして、全く詳細に規定するを得ざるものとせしが、吾人の所謂基本的統覺に於ては、精密に規定せられたる特殊の人類の擬人的形式法なるもの存し、之によりて凡ての表象を吾人の知識となすことを得るなり。故に環象中の凡ての過程は、此の基本的統覺によりて初めて

宇宙の語より人類の語に翻譯せられて精神的財産となるなり。

進むで基本的統覺より見て人類認識の發達を簡單に論述すべし。

精神生活の初めは、快不快の相反せる状態の間を動く漠然たる生命の感情にあるが如し。而して此の感情は、外界に於ても亦内部に於ても作用する刺戟に對する意識の反動にして、此の反動は原始的にして未だ少しも分化せざるものと見ざるべからず。故に此の感情は如何なる表象をも伴ふことなく、全く錯雜渾沌の性質を有し、目的をも亦方向をも表はさざる生活運動中に現はるゝものなり。若し吾人が熟眠若くは氣絶等より覺めたる時は、幾分此に類似せるものを經驗するを得。而して此の如き意識状態は生後間もなき嬰兒に於て存在すべし。

此の際に於ては、不快の状態が快樂の状態よりも一層明に注意せらるゝものゝ如し。嬰兒の如きは、初めて生れたる日、否初めて生れたる時に於て、已に種々なる快不快の感情を經驗す。故に精神生活は、此の時已に分化し初め、益々複雑とならむとするなり。此の如く嬰兒の精神は自己の發展を促

進せしめ、若くは沮害するものゝみを注意するが故に、外界の過程は、それが快若くは不快を與ふる限りに於て存在するに過ぎず。故に嬰兒に來る印象が複雑となるに従ひ、益、快不快の感情は分化すべし。若し啼くと眠るとの間の時間が漸次長くなりて、外界の印象を受くるの餘裕多くなるときは、快不快の種々なる状態が猶明に互に分化し來るべし。例へば寒さと飢とは夫々異なる不快を起し、又溫浴をなす時と食物を享くる時とは夫々異なる快感を受くるが如く、嬰兒の經驗する意識状態が變化して、快不快の感情以外に新なる要素を有するに至るなり。而して此の要素は根本の快不快の感情よりも一層密接に刺戟の性質に關係を有す。

此の要素は即ち感覺と稱せらるゝ心理的要素なり。而して感覺は第一に意識状態の一定の變化にして、之に伴ひ起る快不快の感情と明に異なるものなること、其の他の變化と異ると全く同一なり。

發達せる意識中には殆んど此の如き單純なる感覺の生ずることなく、却つて常に感覺の複雑なるものゝみ存し、而してこは外的刺戟若くは内的刺

戟に關係して實際の事物或は過程なるが如く思はしむ。此の如き感覺複合を知覺と稱す。而して與へられたる一群の感覺を統一的知覺に綜合せしむるものは、即ち基本的統覺の事業なり。故に知覺せられたる事物は力の中心にして、之によりて起されたる吾人の感覺は其の事物の力の發表、即ち性質なり。

知覺は吾人の有機體中に性向を遣す。而して對象の心像は感覺刺戟の働くことなくとも、此の性向の爲めに、吾人の意識中に生ずるを得るなり。此の如くして生じたる知覺を一般に表象といふ。表象の生ずるには種々なる法則に支配せらるると雖、主としては有機體の一種の集中によりて規定せらる。此の集中を注意といふ。元來吾人の自己保存の衝動は原始的状態の人々をして、先づ初めに自己の生命を保存するに最も重要な事物の徴表に注意せしむるなり。此の如き生物學的に重要な徴表の上に注意を集中することによりて、所謂範圍表象生ず。此の表象は其の後に發達すべき論理的概念の重要な前驅をなすものなり。かく範圍表象の生ずる

事は、認識の發達に於ける生物學的要素を明にする上に、最もよく適當せり。吾人は第一に生命保存の依りて繋がるものに注意する事によりて、初めて同一物を一の思惟活動中に綜合することを知り、かくして多くの經驗を経済的に配列する方法を得るに至るなり。而して此の方法たるや最も重要なもの、一なり。

此の方面に於ける最も重要な進歩は言語の發達によりて促さる。元來言語の音は疑もなく自然に出されたる感情の音より生じたるものなり。同じ印象も數、之を繰返すときは、感情は鈍り、而して音が發言者の外圍に於ける過程を顯はすに至る。此の音は同胞によりて了解せらるゝが故に、遂に意識的に之を發して、共同事業の爲めに同族の者と意見を交換するに至る。而して最初の言語音は多くは一綴の語にして、全體の過程を言ひ顯はし、其の中には殊更に物と活動とを分つことなし。然れども此の如き單純なる音にては、到底意見の交換を目的とするに充分ならざるに至りて、一の過程を述ぶるに、二の語を以てせむとし、是に於て語は發展して主辭と賓辭

とに分れ、遂に命題の形式成るに至る。此の發達の形式は、小兒が言語を學習する時に見らるゝものにして、甚だ重要なものなり。此の命題に於て、基本的統覺は十分適當に言ひ顯はさるゝなり。吾人が用ひて世界を解すべき形式の如きも、かくの如くにして今已に明に定められ、又之によりて顯はさるゝ過程も、今は完全に整理せられ、分類せられ、同時に客觀化せらるゝなり。而して言語的形式に表はさるゝ基本的統覺を斷定作用と稱す。かくして今斷定の主辭は獨立に存在する力の中心として表はされ、賓辭は正しく今活動しつゝある主辭の力の發表を示すなり。

然れども一過程を記載するに、一音によりては不充分となれば、茲に於て他の新にして重要な發達の形式生ずるに至る。斷定、薔薇は香し、の主辭たる薔薇なる語は、今は已に此の過程全體を示すにあらずして、薔薇より出づべき凡ての作用を支持するものとなる。故に同じ力の存する凡ての事は、同じ名稱によりて示され、之によりて一の思惟活動の下に綜合せらるゝに至るなり。従つて言語は、凡て名稱を等しくする事物に屬する性質及

び状態の支持者にして、之によりて範類表象は發達して、言語と結合せる確定的の概念となるなり。

或る物に屬する性質状態及び關係は、更に又賓辭によりて其の事物より多少分離せられ、之によりて獨立に觀察し得らるゝに至る。例へば、柔剛の如き性質、歩行睡眠の如き状態、及び大小の如き關係は、此の方法によりて獨立の思惟對象となり、遂に概念となるに至るなり。是に於てか、初めて世界活動に於ける一様性と合則性とを單に變化的に注意するのみならず、更に進むで、常住的思想に於て確定するを得るに至る。之によりて人類精神は、益、新にして益、完全なる思惟の具を得て、經驗を經濟的に配列し、以て世界活動を理解し、支配するを得るなり。かくして斷定作用は益、發達して、常に新にして愈、複雑緻密なる形式となり、多くの思想内容を、簡單にして單純至便なる形式に表はすを得るに至る。

言語は其の思惟經濟的價值以外に、猶之を他の方面より注意するを要す。言語を同じうする種族は、等しき概念を同一語によりて表はし、等しき斷定

を同一命題によりて表はすを以て、經濟的普遍性の外に猶社會的、普遍的、加はる。故に言語及び命題は言語を同じうする種族の共同事業の結果なりとは一般に認めらるゝ所なり。従つて一人の主張は、其の言語的形式に於ては、此の中に凝結せる共同事業によりて支持せらるゝともいひ得べし。若し吾人にして一般に解せられ一般に眞なりとせらるゝ命題を立つる時は、已に黙々の中に同意せらるべきことを豫想せるなり。一般に眞理と認めらるゝ斷定は、此の共同財産たる言語によりて貯へらるゝなり。各個人は此の共同財産中に生れ、而して其の發達は、此の言語並に思想の如き社會的財産によりて、甚だ大なる影響を與へらるゝなり。此の如く認識發達に於ける社會的要素につきて更に簡單に論述すべし。

知覺斷定は今知覺せる過程を一般の方法によりて整理し分類し客觀化するものなれども、此の斷定の外に概念斷定なるもの生ず。こは一定の徵表が一定の概念に屬せしめらるゝ如き方法によりて、活動の法則を形成するをいふ。例へば、鯨は哺乳動物なり」といふ命題は、凡ての鯨には凡ての哺

乳動物に共通せる屬性ありと主張する意なり。此の斷定に基きて、凡ての鯨に對し、皆赤く温き血を有し、肺によりて呼吸し、子を生む等と主張するを得べし。然れども、此の際其の斷定の原始的形式は猶殘れり。即ち自然民族及び小兒の漠然たる擬人論は、外界に存するものを凡て精神ありと見、凡て其の性質は意志活動の發表なりと見るものにして、進歩せる認識に對しては到底維持し得べからざる説なりと雖、又吾人の思惟に取りては、最も抽象的なる概念にても一種の力の中心たるものにして、其の徵表は即ち力の中心の活動的作用なりと見るなり。

斷定作用より真理の概念生ず。是れ認識論に取りては最も重要なものなり。已にプラトーン并にアリストテレースが、斷定は唯眞若くは偽の何れをか言ふに過ぎざる點に於て、一般の表象、或はアリストテレースの語によれば、結合せざる語と異るとなせしは甚だ正當なり。吾人の經驗する表象は事實上存在すれども、其の者としては眞にもあらず、又偽にもあらざるものなり。然るに正しき表象若くは偽の表象といふ事あるは、こは簡單

に言ひ顯はす爲めなるのみ。正しき表象とは正しき斷定に吾人を導くものをいひ、誤れる表象とは不正若くは不眞の斷定より生ずるものをいふ。又感情及び意志決定に於ても、眞偽の實辭は決して用ひらるゝ事なし。唯吾人の感情及び意志行爲に先だちて、此等の經驗の重要な要素をなす所の斷定のみ、眞若くは偽なることを得るなり。而して此の斷定によりて制限せらるゝ感情状態及び意志状態の合目的性は、一に此の斷定の眞偽に繋ること多し。

此故に眞理は斷定中にのみ存す。されど茲に問題となるべき事は、此の概念は如何にして起り、何を意味するかにあり。以上に述べたる見解を基礎とすれば、此の問題に答ふるは必らずしも困難なるにはあらず。與へられたる表象内容は、斷定中に於て分類され客觀化せらるゝが故に、此の斷定は吾人の精神の自發性、即ち自己活動の働きなり。換言すれば、受けたる印象に説明を與ふる活動なりといふべし。今此の自己活動の働きは、全く自己保存の努力に基く事を反省せば、吾人は容易に、外界より來る印象に對し

てなす説明は、其の内容并に目的上、凡て有機體が印象に對して適當に反動するに要する活動標準を規定することに向へる事を了解するを得べし。此の程度の發達に於ては、其の説明が正しといふことは、その説明が目的に適へる活動標準を生じ得る時をいふものにして、之に反して生命保存を害するが如き活動標準を與ふる場合には、それは僞なる説明なりとせらる。詳言すれば、後には斷定の真理若くは虚偽として吾人の意識に上り來るべき實際的事實と其の説明との關係は、初めに於ては猶反應傾向の形式に於てのみ存在すといふにあり。然れども文明の程度發達し、生命保存の條件複雑となり、唯周密なる注意を以て得たる多くの活動標準によりてのみ達せらるゝが如き、遠大なる目的を樹つるを要し又樹つるを得るに至る時は、印象の利用と説明との間に大なる時間生じ來る。時としては、吾人は之を利用することなくして説明を完成することすらあり。此の如き説明を、明に言語及び文字に表はして、初めて完成せる斷定を將來の利用の爲めに貯へ置くを得べし。然れども凡て完成せる説明は悉く利用され得べきものに

あらざるを以て之に選擇を施すを要す。是に於てか將來利用し得べき條件を探究するに至る。かくして初めて真理の概念生ず。而して斷定の真理とは、其の利用性が必要な活動標準を規定する條件に外ならざるなり。此の真理の概念に於ける活動的要素は、皆將來の活動に關するものにして、此の要素に就ては近年まで學者に認められざりし所なり。かくの如く此の要素は將來の活動に關するものなるが故に、理論的思惟は皆將來利用の傾向を以て貯へられたる斷定なりといふを得べし。然れども人類の活動は常に廣大となり、且つ常に目的を遠大の所に置くを以て、理論的思惟は説明と利用との間をして益、廣く分たしむるに至るなり。又之によりて理論的思惟并に研究は相對的獨立性を得、而して此の獨立によりて、思惟は恰かも生活其者より分離して全く之と無關係なるが如く思はしむ。何れにすも、此の純粹理論的思惟内に法則及び概念成立し、而して此等は皆新に真理概念の形成に導くものなり。

理論的真理概念を明に意識するには、言語的生活の事實に負ふ所甚だ多

し。これは即ち否定若くは否定不變詞の起原を意味す。同一事實にしても人によりて種々に説明せられ易く、而して凡ての説明は文化發達の初めに於ては、同時に一定の活動標準に對する傾向を含むものなり。例へば子の説明を承認せざるものは、即ち之によりて此の説明と結合せる活動標準を排斥するなり。此の排斥は初めには活潑なる感情と結合するを以て、特殊の音聲によりて言ひ顯はさる。而して此の如き排斥が數、繰返さるゝときは、感情は消失し、之を表はせる音聲のみ、遂に否定不變詞として斷定の形式的要素となるに至るなり。凡ての説明即ち凡ての斷定をなす場合には、凡ての排斥を知らざるべからず。若し此の如き排斥あるに拘らず猶前の説明を固執する時は、其を辯護するが爲めに其の斷定の眞理なることを一層明かに意識するに至る。

故に眞理とは斷定活動と斷定されたる過程との間の一定の關係をいふ。故に此の關係の種類と關係の存する條件とを規定せざるべからず。通常眞理とは一斷定と斷ぜられたる過程との吻合に存すといふ。従つて斷定

さるゝ過程は、單純にも斷定中に於て模造せられ又寫さると見るに至る。此の如き素朴なる考は、今日の解釋と相應するものにわらず。元來表象内容は斷定中に整理せられ分類せらるゝが故に、茲にては已に吻合一致をいふを得ざるものなり。故に斷定を眞なりといふべき場合は、其の斷定によりて表象内容を整理し客觀化する事が、實際の過程と相應する事、恰かも其の斷定に基ける假定が之を生ぜしものと事實上一致する時、或は又斷定が斷定されたる過程に相應し、又は斷定と過程とが互に相當適合するが如き時をいふとせざるべからず。故に客觀的事實の變化は斷定中に於て之に相應せる變化を生じ、又斷定より生ずる結果は其の過程に對し確實性を有すといふ意味に於て、斷定は實際上の過程の機能ならざるべからず。

斷定が眞理なるや否やの最も重要な最後の標準は、其の假定が事實と一致するにあり。之を客觀的標準と稱す。故に斷定の眞なるを證明し、之を他に信ぜしめ得るは、所謂斷定の證據によるにもわらず、又其の思惟必然性に存するにもわらず、全く其の斷定に基ける假定が事實と一致する點に

あり。かくして初めて宇宙は不可抗的に吾人の斷定に證明力と眞理價値とを賦與するなり。

然れども又此の如き確證をなす能はざる斷定の存することいふ迄もなし。例へば過去の歴史的事件を斷定する時若くは認識の熱望より經驗の限界以上に出づる時の如き殆んど不確實なる眞理の標準を得て満足せざるべからず。然れども其の標準は猶吾人が全く誤れる思想の道に迷ひ入れるにあらざとの保證を與ふるものなり。其の所謂標準とは同じ、思惟者間の同意にして、吾人は之を内主觀的標準と名づくべし。

此の二の標準は時には無意識的なる事あれども事實上吾人が一斷定を以て眞理なりと確信するに至るには之を以て標準となす。故に或る斷定をなす場合に若し其に基ける假定が同じ場合に數一致せる確證あるときは、之を想起して最早此の假定の實際上の一致を俟つを要せずと考ふるに至る。此れと同じく、同じ思惟者の同意の場合にも亦多く之を豫想す。例へば數及び大きに關する多くの數學的斷定に於ては、此の斷定が已に認め

られたる數の法則に従ひて作らるゝ時は、其の上を基ける假定は必らず一致すべく、又其の斷定の意味を解し得る思想家は必らず之に同意すべしとの確信を有す。此の如く、或る斷定の確實なる事を一般に確信する結果、多くの思想家が、或る斷定は凡ての經驗以前に存し、而して經驗による確證を俟たずして的確眞實なること疑なしと信するに至る。プラトンは曾て此の如き假説的事實に基きて、人の靈魂は經驗によりては到底得る能はざる知識を有するが故に、肉體に宿らざる以前に已に存せざるべからざる事を證明せり。此の直觀的知識は、即ち靈魂が猶未だ肉體と關係せずして、純粹不穢の神性的存在をなし、事物の本質を正當に直觀するを得たる時期よりの記憶に外ならずとなせり。此の思想は稍、其の神秘的形式を除きて十七八世紀の哲學者間に再び表はれたり。此の時に於ては一般に先天的觀念、原始的直觀を論じ、而して理性には其の力によりて眞理を發見する能力ありとなせり。カントは、純粹理性批判中に於て此の能力を研究し、此の書の劈頭に於て「純粹數學は如何にして可能なりや」の問題に答へむとせり。

氏は即ち吾人の直観能力の中、如何なる原始財産が經驗的要素を含まざる断定を作り得るか、又此の全然經驗より生ぜざる断定が、凡ての經驗に對し何故に確實たらざるを得ざるかを示さむとせり。

認識過程、特に眞理概念の生物學的觀察によれば、此の如き原始財産、原始的直観の假定は無用の贅物にして、又全く證明し得べからざるものなり。蓋し或る断定の證據及び思惟必然性は、必ず過去の經驗に基きて起るものにして、人類精神は其の發達中に於て經驗を經濟的に組織すべきことを學得す。故に前代の人々の經驗を利用し、又之を能ふ限り簡單なる形式に顯はさむが爲めに其の方法を發見し、又後代の子孫は已に前代の人々の得たるものに基きて更に建設するを以て、已に完成せる事業は更に之を始めより繰返すを要せざるに至るなり。小兒は已に小學校に於て前代より遺れる概念等の用法を教へられ、其の結果遂に吾人が小兒時代より親しく知れる思惟形式は、是れ人類精神の原始財産なるが如く考へ來るなり。然るに實際に於ては、そは前代の人々が困苦して得たる遺産に外ならざるなり。

今若し認識の過程を、成人の意識中に起るが如く分析的に記述せむと欲せば、直に何人も自己自らの經驗より起ると指定し得ざる要素的過程あるを知り得べし。之によりて再び概念并に思惟形式に於ける先天的原始財産の考起り來る。故に分析的記述方法は、心理學的事實及び法則を研究するに適せるものにあらずして、發生的生物學的觀察法の助によりて初めて其の事實を發見するを得べきなり。

此の觀察法に基きていへば、先天的經驗は一も存することなしといふを得。凡ての人に共通する認識形式は、有機體と外圍との共働より生ずるものにして、此の認識形式の最も重要にして、又最も根本的なものは、實に基本的統覺及び其より生ずる断定作用と見ざるべからず。曾てカントが悟性の先天的根本概念となしたる實體、并に因果律の範疇の如き認識形式も、亦全く是より發達し來れるものなり。

實體とは固定的なるものにして、現象の變化中にありて少しも變化せざる事物の本質をいふが故に、此の概念は已に感官知覺中に存在するものな

り。所謂感官知覺に於ては、感覺の複合を基本的統覺によりて綜合して統一的な事物となすなり。吾人は常に事物を其の屬性より分ち、之を以て其の狀態及び關係の變化する中にありて固定維持せらるゝものなりと見、又斷定作用によりて主觀中に固定的のものを創造し、之を以て之より生ずる作用の支持者となす。若し又事物に於て質料と形式とを區別する時は、質料は形體及び運動の變化する中にありて常住に維持せらるゝものとなす。かくして初めて、不變固定のものとして凡ての變化の根本に存し、自らは常に變化せざるものゝ概念生じ來る。凡ての主觀は實體概念を自己の中に有するが故に、此の概念は常に現實を解釋する中に顯はれ來るは自然の數なり。従つて凡ての人が此の中に悟性の先天的根本形式顯はると信ずるに至るなり。此の實體概念は哲學的體系中にも亦科學的理論中にも皆存在す。例へば物理學并に化學に於ては、原子を以て最後不變の實體にして、凡ての變化の固定的支持者なりと見たること已に久しく、又現今に於ても、かく見るもの多きが如く、更に生物學に於ては細胞或は其の成分(神經原等)

を最後の有機的實體と見るが如し。現今に於ては、實體概念をば自然觀察より驅除せむと企てたりしが、思ふに此の驅除は、吾人の思惟能力によりては、完全に又永久に成功し得むこと難かるべし。

因果律の認識形式は、吾人の意志行爲并に凡ての斷定活動中に直接に存在す。若し吾人が花咲ける木の知覺を斷定に變形して、この木は花咲くといはゞ、木は即ち力の中心にして、自ら花を生ぜしものなり。吾人自身の意志行爲に於ては、吾人は意志決定より、全く直接に筋肉收縮に移行するを経験す。然れども、時としては、外圍中に生ずる出來事に於て、一系列中の唯一節のみを知覺することあり。此の時吾人は吾人の意志行爲より比論して其の缺けたるものを補ひ、更に基本的統覺によりて、正しく繼起せる作用活動の系列を以て、恰かも其の中には何等の缺くる所もなく繼起するかの如くに考ふるなり。かく吾人は凡て知覺し或は推理する過程を以て、必らず之に先行する過程の結果なりと思惟せざるを得ざるを以て、因果的結合の概念を吾人の思惟中より驅除せむは全く不可能の事なり。而して吾人が

斷定をなす時は、必らず實際に活動する力の中心を定め、此の主辭と賓辭との結合を以て、常に凡ての因果的關係の原形となすなり。

因果概念の心理學的研究并に批評に従事せるは、實にデービッド、ヒュームを以て嚆矢となす。氏は吾人の直接の經驗中には、唯規則的の繼起あるのみにして、因果の觀念は誤りて吾人が外界に映出せるものなる事を證明し得と信じ居たり。カントは自らいへる如く、此のヒュームの批評によりて、獨斷の眠より覺まされたる人なるが、因果律中には悟性の根本形式存し、外界より來る感覺材料を整理し、以て經驗をして可能ならしむと確信し居たり。然れども吾人の觀察によれば、因果律は斷定作用より必然的に發達せるものにして、斷定作用が有機體と外圍との相互作用の結果なると異なるものに非ざるを知る。故に因果律は全く認識の主觀的要素にのみ屬するにあらずして、其の生ずるには客觀的要素も共働する所甚だ多く、従つて之を客觀的原因となすを以て合理的なる考といふべし。近代に於て再びヒュームに歸り、氏と共に吾人は唯事象の繼起を經驗し得るのみにて、決して其の因果

的結合を經驗することなしと主張するものあり。之に對しては單純なる繼起は、因果的結合と明に異なれりといふを得べし。規則的に繼起する活動の間には、多くは時間的繼起の外に、猶吾人が毎日意志衝動より筋肉收縮を起す意志行爲に於て經驗する結合に等しき、內的關係の存すればなり。此の如き關係の存する所、若くは確かに存すと推理し得る所にては、因果的關係ありとなし、若し之を缺きたる所にては、時間的繼起のみとなす。例へば大戰爭以前に彗星の出現するあるも、經驗によりて得たる吾人の悟性によれば、彗星は決して戰爭を以て力の發表となす力の中心なりと觀察せらるゝこと能はず。故に吾人の前には、唯繼起の存するのみに過ぎず。之に反して一服のキナエンが、患者の體温を減少せしむれば、吾人は此の經驗を繰返し、之に基きて正當にキナエンを服用すれば體温降下の生理的過程を生ずる事を假定し得べし。

數の概念も亦斷定作用より發達するものなり。同一物の群は、同じものを表はす概念を繰返さしむるに至る。第一に、かくなさしむるものは、二つ

づ、具はれる手、手目、目脚、脚等なり。此の繰返しは、初めは確かに身振を伴ひ、而して繰返しの数、其の物によりて規定せられしなり。三つの木の群を見て、木、木、木と斷定を下す人は、第三の繰返しにて止まる。更に進みて之を繰返さんには、其の機會、即ち之に屬すべき事物を缺如せるなり。而して此の最後の繰返しは、或る音によりて伴はれ、此の音より漸次之に相應する數詞發達し、凡ての事物の群に應用せられて、同じ度數の繰返しをなさしめ、其の結果茲に第一の數概念生ず。凡ての數は單位の集りをなし、此の集りは、詳しく觀察すれば、此の單位及び他の數に對する一定の關係を示す。而して此の關係は、事物の凡ての群に於て同一なるを以て、從つて凡ての事物に對して確實なり。此の如く思惟の綜合的活動は、言語と共働して、高き概括をなし、且つ經濟的配列に對して大に價值ある所の極めて重要な概念を發見せり。

此の如く斷定作用より漸次發展して、吾人が常に用ひて精神的武器となす所の認識形式及び概念生じ來る。然れども此の際、基本的統覺は常に活

動して、複雑なる斷定すら、全く同じ方法に於て、與へられたる内容を整理し客觀化するなり。即ち吾人は外圍の印象を、宇宙の語より人類の語に譯して、此の印象を吾人の精神的財産となすなり。更に吾人は之を利用して已に知れる自然力をして、吾人の用を辨ぜしめ、かくして困難なる條件の下にも吾人の生命を維持し常に一層内容多からしむ。故に人類の有機體と其の外圍との間の相互作用の結果を總括すれば、世界の認識は、世界に形式を與ふる事によりて成り、世界の形式は、認識に依りて作らる、といふを得べし。通常凡ての認識の目的とせらるる眞理は、已にいへるが如く、斷定活動と、其によりて形式を與へられ又客觀化せらるる過程との間の一定の關係なり。此の關係は、勿論思惟者の意識中にのみ存する者にして、斷定を聞きて之を其の斷定によりて表はさるる過程と比較する時、最も明に表はれ來る。かく他人の斷定を檢覈する時、認識發達に最も重要な心理現象現はる。若し吾人にして聞き若くは讀みたる斷定を理解せむとせば、其等の斷定中に已に整理せられ分類せられたる表象内容を、再び綜合統一せざるべから

ず。故に獨立に生ぜ、斷定は分析なれども、他人より得る斷定は綜合なり。此の綜合統一の活動に於ては、數、困難と障礙と起り來る。故に若し他より聞きたる斷定を、一の統一的表象に綜合するを得ざるときは、其の聞けることを理解せざるなり。されば之を質問して、其の斷定中に存する説明の正しからざることを發見することあり。此の場合に於ては、吾人は聞ける事、或は讀みたる事をよく了解すれども、決して之を信ずることなし。此の如くして信仰、或は一般にいへば、信念なる心理現象生起す。

近來斷定作用の本質は、信念の活動中に存すとなす意見多し。英國の論理學者ジョン・ステュアート・ミルは、斷定すると斷定を信念するとは同一なりといへり。然れども信念の對象は、斷定なることもあり得るを以て、此の説は全然正しとはいふべからず。例へば表象其の者は眞にもあらず、又偽にもあらず、故に又信念せられ得ざるが如し。されど又此の説中に於ても、凡ての斷定活動には客觀化する要素ありといふ點は正しといふべし。若し信念と斷定とが同一ならずとせば、此の現象の本質は何れにありやを研究し、

其の種々の形式及び其の強度の程度を知ることを勉めざるべからず。

信念は知識と信仰との二つの經驗に於て表はる。此の二つの經驗は通常考へらるゝが如く、相反對するものにあらずして、唯程度の差に過ぎず。知識とは吾人の達し得たる最高の信念なり。されば知識といふ時は、或る斷定をなすに際し已に其の眞理の客觀的標準并に内主觀的標準の與へられたる場合、或は假定其者が事實と一致する事を經驗によりて保證したる場合、若くは明に同じ思惟者の同意を得る場合をいふ。されど此の如くならざる場合にも、猶且つ與へられたる斷定を信念せむとす。此の時には之を確信といひ信仰といふ。知識は最高程度の信念にして、是より以上の程度なきが故に、強度を云々すべき理由なし。然れども信仰及び確信は、種々なる強度に於て現はるゝが故に、吾人は確實の度を異にして信仰し、又確信するを得べきなり。

若し信仰及び確信の心理學的性質を知らむとせば、先づ第一に此の兩者は強度を異にすといふ事實より見て、直に此等のものゝ關係する所は、思惟

過程にあらずして感情なるべしと想像し得べし。故に此の解釋は、吾人が凡て信仰の反對なる疑を以て感情状態に外ならずとなす考に根據を與ふるものなり。

今此の感情の生ずる條件を問はむに、其の答は必らずしも困難にはあらず。信仰若くは確信の感情は、或る斷定が今迄の經驗即ち吾人の世界觀と吻合することを明に意識し得る時生じ來る。故に若し斷定が今迄の經驗の凡てに矛盾し、吾人の世界觀に一致し得ざる時は、其の斷定に信仰を置くことなし。されば新に表はれたる斷定の結果、數、烈しき精神上の闘争を生ずることあり。例へばコペルニクスの説の如きは、當時の人は、聖書が科學上の問題にも最後の決定を與ふるものと考へ居たるを以て、長き間信仰せられざりしが如き是なり。

發達の經過中に於ては、勿論以前に一般に眞なりと信念せる斷定も、不正なりと證明せらるゝことあり。此の如き斷定は已に凝結して概念となり、常に用ひられつゝあるを通常とす。而して若し已に其の斷定にして眞な

らずとせば、其の概念も亦實在する力の中心と見ることを得ず。例へば紀元一世紀時代、異教徒が改宗して基督教を信ずるに至れば、以前拜せし諸神格は其の實在性を失ふが如し。又十七八世紀に於ける化學者は、凡ての可燃物には燃素なるもの存在すと確信し居たりしが、後ラヴォジエー初めて燃焼過程を正しく説明して以來、此の概念は其の確實性を失ひ、燃素も其の實在を失へるが如し。かくして眞理概念に類似せる思惟の具成立し、概念が實在に對する關係を顯はす。此の思惟の具を存在概念と稱す。此の概念も亦近時明にせられたるものなれども亦多くの反對を生じたり。吾人の解する所によれば、存在は、主辭の作用能力を顯はせる賓辭なり。神は存在すといふ時は、人類の想像力の作り出せるものにあらずして、吾人が彼を信ずると否とに拘らず存在すといふ意なり。即ち神は獨立に存在する力の中心にして、吾人は彼の作用によりて之を認識するなり。シラーの「保證人」中に出づる暴君デオニシウスは、獻身的忠義の如きもの、實際に存することを信ぜざりしが、此の忠義の作用と見ざるを得ざる事件を経験して、忠義

は、げに空しき幻想にはあらずと確信するに至れり。

以上認識の發生的生物學的觀察の示す所によれば、人の認識は自己保存の衝動より生じ、其の發達は個人及び種族の生命を豊富ならしむる方向に向へり。吾人の中心體制は生理的的心理的研究によりて漸次精密に知らるるものにして、吾人の認識に共通の形式を與ふ。吾人は此の形式を基本的統覺中に見、又此の統覺より發達する斷定作用に於て一層明白に之を知れり。人の認識は凡て吾人の中心體制に基く所の分類及び客觀化によりて現實を同化するにあり。然れども此の全過程は、唯常識的に、批判的實在論に基きて、吾人に依存せざる現實態の獨立存在を假定する時、初めて了解するを得べし。此の現實態とは如何なるものぞ。此の問題と共に知識の哲學の第二部に移る。是即ち哲學中最も古く、而かも同時に其の中心部分をなせるものにして、之を實在の學といひ、形而上學或は本體論と稱せらるゝを常とす。

第四編 形而上學即本體論

第一章 本體論上の問題

本體論上の問題は認識問題と密接に關係す。蓋し吾人は何を認識し得るやの問題は、自づと存在するものは何ぞや、實在物の本質は如何の問題に導くものなればなり。然れども歴史上に於ては、本體論の問題は認識問題よりも以前に提出せられたり。こは吾人の感官及び思惟は、先初めに、生存する爲めに順應せざるを得ざる外界に向ふものなればなり。其の後、年月を経るに従つて漸く自己について考察するに至るなり。故に實在の性質に關する問題は、認識論上未だ素朴的實在論以上に進まざる人々にも、甚だ興味あるものなりとす。

未だ哲學思索をなさざる人々は實在物とは何ぞやの問題に對して、そは吾人が見聞し觸接する周圍の事物なりと答ふべし。故に此等の素朴的な

る考よりいへば、實在するものは秩序もなき多數の個物に外ならず。然れども猶未だ理論的思辨の起らざる以前にありても、已に實際的世界觀上生物と無生物との間に區別ある事を注意し居たりき。無生物は外部よりの刺戟が之を動かすに至るまでは静止するものにして、生物は自己の衝動によりて合目的に運動するものなり。故に生物には、其の中において此の運動を起さしむる本質内在せざるべからず。此の本質は、睡眠の際、暫時肉體を離れ、死に於て永久に離れ去るものにして、通例此は氣息の如くに考へられ、又肉體と同じ形を有すとせらるれども、勿論觸接するを得ざるものと考へらる。従つてこの物は或る意味に於ては非物質的なり。此の本質は即ち靈魂にして身體と異り、従つて身體と分離し得るものなり。此の靈魂の信仰は、人種學の明にするが如く、凡ての人類に共通せる財産なり。此の考は元來死并に夢の現象より必然的に發展し來れるものにして、全然此の信仰を缺くが如き種族は是あることなきなり。

此の時期に於ても、已に實在物を、二つの互に全く異なる群に分つ。即ち

物質界と精神界と是なり。されど猶此の區別が論理的に嚴密なるものにあらざる事は勿論なり。例へば死者の體少くとも今死したる人の體は、猶未だ感覺性ありて心理的なる性質を所有すと考ふるが如き是なり。故にアキルがヘクトールの屍體を引廻して敵を苦しめむと欲し、又パトロクロスの靈魂が男性的勇氣と青年の氣力とを捨つるを悲しみしは、肉體が此等の性質を所有するものと見るに由るなり。概していへば、此の程度の發達に於ては、肉體は、人格の所有者にして、靈魂は、是より異なる本質とせられたるなり。更に靈魂は形體を有し、時には見らるゝ事もあり。故に肉體的にもあらず、又觸るゝことをも得ざれども、嚴密に非物質なるにはあらず。

哲學的思辨にありては、此く漠然として嚴密ならざる考を以て満足せず。現象の規則性及び其の統一的關係あることを見て、宇宙を統一的原理によりて理解し説明せむと努力するに至る。

宇宙を説明するには唯一の原理にて充分なるべく、凡ての實在物は統一的等種の性質なりとなす考を一元論と稱す。

思想の統一性を
追求するは、
哲学の第一の
任務である。

一、二元論の
問題

之に反して二つの異なる實體本質を假定する考へ方を二元論と名づく。

二つ以上の實體存在となす説を多元論と呼ぶ。

未だ哲學思索に入らざる人々の考は、之を曖昧二元論といふべし。之に

反して一元論には多くの種類あり。宇宙には質料的なる物質のみ存在し、

凡ての精神的なるものは、物質の機能若くは直に是れ一種の物質なるに外

ならずと見ることを得べし。此の考へ方を唯物論と名づく。

然れども更に精神世界のみ眞實に存在するものにして、凡ての物質的の

ものは表象として與へられたるものに過ぎざるが故に、之を精神の顯現の

形式と見ることを得とも主張するを得べし。是即ち唯心論の立脚地なり。

此の外猶種々複雑なる形式の一元論あり。此等は若し餘りに重要なら

ざる區別を除けば、之を二種に分類するを得べし。其の一の形式は、一種の

原始實體を假定するものにして、こは未だ精神にも物質にもわらずし

る此の二を自己の放出物、又は屬性若くは其の他の形式として自己中に含

有するものなり。而して此の原始實體は、自己原因として、又多くは神性と

テアリ 如何なる
テアスカ知ラズ
道徳ヲ老人
尊長
セウコウシ

1930
12/12
1930

欠

欠

支配する觀念の本質を口にせば、其の人は眞に已にプラトーン派の人たるなり。羅馬時代の新プラトーン學派の思想家、殊にプロチンは、特に此の説を神秘的意味に於て發展組織せしめたりき。

中世紀は、嚴密に二元論なりしが、近世の初めに於ては、デカルトが意識を以て最も確實なる真理の源泉と見たるを以て、唯心論は再び現はれ來り、遂にライブニッツに至りて最も重要な代表者を得たり。即ちライブニッツの説ける單子は精神の本質にして、宇宙は之より成るといへり。又英人バークレーは、認識批判的觀念論を創めたりしが、氏は精神のみ存在し、宇宙は其の意識内容として認むべきものなりと主張せしが故に、嚴密にいへば已に唯心論者なり。

最近に於ては、ウィルヘルム・ジントは、唯心論的形而上學を建て、實在の内容は精神的性質を有する數多の個人的意志活動なりと解釋したり。更にヘルマン・ロッツェ及びテオドール・フヒネルも亦本體論上の問題は、唯心論に於て満足なる解決を見出すを得と信じ居たり。ロッツェは、物質と精神とは全く

精神的性質を有する絶対の形式なりと解し、フエヒネルは、唯心論を取り、物質的原子にても其の最後は精神的なりと説明せり。

猶又シッペンハウエル及びヤコーブ、フロッシュママーも唯心論者と見ざるべからず。事物の最後の眞の本質につきて、シッペンハウエルは之を意志なりとし、フロッシュママーは之を宇宙想像と見たればなり。吾人が先に神秘的なる考として述べたる神靈論の如きに至りては、議論よりも寧ろ幻術を弄するが如きものなれども、猶唯心論の名稱を取るにあり。されど之は許すべからざるものとして排斥せざるべからず。

現代に於ては、獨國にルドルフ、オイケンあり、米國にジサイア、ロイスあり、共に熱心に宗教的色彩ある唯心論を主張せり。オイケン、吾人は熱烈なる精神的努力によりて、氏が眞の生命、即ち生命の「獨立」を現はし居るといふ「精神的生命内容」を體得せむことを熱心に慫慂せり。此の「精神的生命内容」は、オイケンに取りては、人類の共通的精神事業の成果にあらずして、一種過境的神性的なるものなり。之と同じく、ロイスも亦眞の實在は、精神的性質

のものなる事を確信し、又常住にして神性的なる世界秩序が事物の最後の根柢なりとせり。ロイスの哲學は、個人の生活に於ける社會的要素を甚だ重く見、又精神が互に相互活動をなすことより進みて、常住にして神性的精神的なる實在を結論し來る點に於て特別なる意義を得たり。

唯心論は認識批判的觀念論と密接に關係し、兩說何れも世界の本質は精神的性質のものなりとなす。然れども兩者の根本的區別は、認識批判的觀念論は一步たりとも經驗以上に出で、形而上學に入るを慎み、唯經驗中に與へられたるものみに止まる點に於て其の長所を有するに、唯心論は現在に於ても將來に於ても、明に意識的形而上學にして、直接の經驗以上に出づるものなり。故に認識批判的觀念論よりいへば、世界は意識内容なれども、唯心論よりいへば、認識主觀に依らざる獨立の精神的本質なり。唯心論は之を精査すれば、自然民族の生氣論を哲學的に組織したるものに外ならざることを知る。原始人は、樹木泉水殊に石の如きも、意志を有する生物にして、人に利を與へ又は害を加ふるものと考へたり。哲學的唯心

論者は自然活動の法則性を認識し、又外界に於て無數の原子ありて、機械的化學法則に従ふて牽引し、又拒斥し、かくして、神の生きたる外衣を織るを見らる。然れども彼は精神的主觀の缺けたる客觀の獨立的存在を思惟し得ざるを以て、是等のもの、最後の統一は、精神と意識となりとなす。或は此の精神的主觀を以て、表象、意志若くは想像なりと考ふるも、何れも此の汎心論は吾人の基本的統覺の命令の下に立つものなり。思ふに宇宙を解する爲めに取らざるを得ざる形式は、固より宇宙の眞の本質の一方面なること疑なきも、之を以て其の唯一なるものとなさむは、不可能にして又價値なき事なり。

唯心論は、或る意味に於ては唯物論よりも高尚なり。何となれば精神生活の如き直接に與へられたる事實を、其の世界觀念の中に入れ、決して之を以て無用の贅物と蔑視することなければなり。然れども茲にては物理的のもの、精神的のものとの區別は抹殺せらる。故に物質が思惟し得る所以を解し得ざる事は、精神が延長性を有し得る所以を解し得ざると異なる所

なし。已にさへるが如く、物質的過程は感官によりて知覺し得れども、精神的過程は知覺するを得ず。此の如く全く比較するを得ざる過程が、如何にして獨立に生じ、而して相互に移り行き得るやは、物質より精神出づといひ、或は精神より物質生ずといひたるのみにては、何れにしても解し得べからざるに終る。

然れども唯心論は、更に他の根本的なる缺點を有す。若し宇宙が精神的本質より成るとせば、精神的活動の中に、固定物即ち實體の概念を導入するものなり。然るに已にいへるが如く、吾人の精神的生活の特質は、意識に於て起るが如く、常に唯事象として、活動としてのみ顯はるゝ點にあり。此の如き活動を解釋する爲めに、固定的實體の概念を入れるゝは全然不適合にして、必らず誤解に導くものなり。現代の物理学の如きすら、自然科学より此の概念を驅除し、唯活動の法則のみを論じて、少しも固定的支持者を説くを欲せず。此の如き努力は、物理的過程に關しては必要なるが如きも、精神生活の觀察には必らず實體概念を絶對的に驅除することを要す。又現代の

心理學も大に之を要求し、已に一部分は之を完成せる程なり。蓋し心理現象の性質を正しく了解せむとせば、精神的實體の概念は全く矛盾せるものなればなり。故に心理學は、第一に精神的過程の眞の経過及び性質と吻合せざる世界觀に對して、防禦せざるべからず。

唯物論及び唯心論の如く一方に偏せずして、本體論上の問題を解決せむと勉むる他の一元論的體系あること前已に之をいへり。吾人は常に不斷の抽象作用によりて、物質と精神、物理的活動と心理的活動とを包括するが如き最高概念に達せむと勉む。此の如き最高概念は、之を固定的常住の實體と解し、或は之を永恆の生成、即ち活動の法則中に發見すとす。故に之に應じて宇宙進程の一元論的解釋に於て、實體一元論と活動一元論との二形式を區別するを得べし。

第四章 實體一元論

此の考の最も古きものは、紀元前五六世紀に希臘に於て成立せる所謂エレア學派の説なり。此の派名の起原は、此の學派に屬せし多くの思想家の故郷なりし下伊太利のエレア市より來る。此の派の開祖クセノフアネースは、已にホーマー及びヘシオッドの歌へる諸神が、擬人的に解せられたるを非難し、神は其の形に於ても精神に於ても、人類と類似せるものにあらずと論じたり。然れども此の説が初めて本體論的に組織せられたるは、其の弟子エレアのバルメニデースによりてなり。前に已にエレア學派は、主知論的認識論を立てたることをいひしが、バルメニデースのいふ所によれば、感官知覺は全く欺瞞的なり。氏が假設せる女神は、氏に教ふるに、何物をも見ざる眼並に騒鬧なる耳に制御せられざらむ事を以てせり。されば眞の實有の認識に導くものは、唯純粹の思惟あるのみ。而して此の實有は、統一的常住的にして生成なく、従つて過去を知らず、未來を知らず、唯永恆の現在あるのみなり。更に又此の實有は、不可分割不變異にして、雜多並に運動を有することなし。されどバルメニデース自身は、其の嚴密なる抽象を論理學的

歸結にまで徹底せしむるを得ざりき。故に氏は感官を超出し、唯純粹思惟によりてのみ解せらるゝ實有を、中心より凡ての方面に等しき權衡を有する丸き球に比較したり。是即ち氏が抽象的なるものを、感覺的の形に於て表象せるを示せり。其の弟子エレアのツェノーに至りて、其の師の説を深く且つ鋭く建設せむとし、感官の信賴するに足らざる事、従つて雜多並に運動の存在せざる事を種々の方面に於て證明せむとせり。此のエレア學派の説は、大にプラトーンに影響し、プラトーンはエレア的思惟法によりて、其の觀念を常住不變と説き、又純粹なる精神の本質にして、唯幻の如き現象の爲めに其の精神を汚されざる人にのみ解せらるべく、決して感官によりて知覺せらるゝことなしとなせり。

エレア學派の根本思想は、今日に於ても其の意義を有す。未來に於ても亦當に然るべし。感官知覺は、自然科學の問題に於ても最後の裁決たらざる事は、思想界に於て最も明に且つ最も確にニコラウス、コペルニクスによりて證明せられたり。吾人が毎日出没するを見る太陽は、實際に於ては其

の位置を變ずるにあらざることを信ぜざるべからずとせば、彼の抽象的なる數學的思惟、構成的なる科學的想像は、何物をも見ざる眼並に騒鬧なる耳よりも、一層眞理たる價值を有すること勿論なり。されど又コペルニクスは、哲學者に對して更に他の事實を教へたり。即ち其の以前にありては、宇宙の中心をなしたりし地球は、氏によりて小さき平凡なる遊星の一として、他の多くの遊星と共に、太陽の周圍を廻るものに過ぎすとせられたる事是なり。此のコペルニクスの天文學上の説より本體論上の結論を出したる最初の哲學者は、ゾルダノ、ブルーノ(一五四八—一六〇〇)なり。氏は狂熱を以て、世界の無限性並に宇宙の統一性の學説を説き弘めしが、一六〇〇年二月十七日、羅馬に於て異教徒として焼き殺されたり。蓋し氏の説は當時認められたる宗義に矛盾したると、又氏は命令を奉じて其の確信を廢するが如き事を拒絶したるが故なりき。此のブルーノの宇宙の統一性の思想は、後に示すが如く、同時に神と世界との同一を意味するものにして、後世に影響を及ぼせし所甚だ大なり。バルフ、スピノザ(一六三二—一六七七)はプ

ルノ程の生氣なかりしも、其の反對に一層論理的に徹底せる他の形式に於て、再び彼の説を採用せり。スピノザの體系は、實に實體一元論の最も純粹に顯はれたるものなり。

スピノザは、アムステルダムの猶太人なりしが、幼き時已に舊譯全書を學び、猶太的宗教哲學者の説を授けられたり。氏は茲に於て、已に神の概念を知れり。此の概念は一般の人類の思惟が達し得べき限りの凡ての擬人論を脱却せるものなり。故に此の神は、全く世界其の者より異れる本質にして、山の現はれし以前詩篇九〇に存在し、其の語によりて世界を創造せし神なり。然るにスピノザは、デカルト一五九六—一六五〇の説を習得し、其の數學的證明の嚴密なることを知るに至りては、已に神と世界との二元論は氏の満足する所にわらざりき。氏は舊譯全書の中に屢、教へられたる神の愛の命令を、最も嚴密に且つ最も廣き意味に解し、此の命令は人類が神の無限性中に絶對的に歸投することを要求するに外ならずと考へたり。進むで氏は神を以て唯一の本質なりとし、凡ての物質並に精神的の實在は、是よ

り論理的歸結として導き出さるゝものとなすに至れり。故に氏に取りては、ブルノと同じく、神と世界とは全く同一なるなり(Deus sive natura)。

此の唯一の實體は、其の概念中に已に存在を含むものにして、思惟と延長との二つの屬性を有す。故に宇宙に於ける凡ての個物、従つて凡ての人も、皆此の唯一實體の様式、即ち其の顯現の形式に外ならざるなり。若し事物を観察するに、其の孤立分離に於てせずして、永恆、常住の觀察點(Sub specie actus omnium)よりせば、凡ての實在も亦凡ての活動も、皆完全なる統一をなすを知り得べし。即ち唯一實體のみ存在し、其の屬性が無數の顯現の形式に於て現はるゝなり。かく人類の表象の秩序も事物の秩序も、元來同一の源泉、即ち唯一永恆不可分割の實體より流れ出づるが故に全く同一なるなり。故に人類の認識及び同時に人類の幸福の最高目的は、實に宇宙に歸投することにして、スピノザの言にていへば、神に對する知的愛なり。

スピノザの世界觀は、其の統一的なる點に於て、又其の嚴密なる成體をなす點に於て、偉大なる體系なることいふ迄もなし。然れども之を精察する

時は、其の根本に於て甚だ重要なるものを看過せるを見る。第一に、よく屢數へらるゝ缺點は、氏が理由と歸結との論理學的關係を、原因と結果との本體論的關係と同一視したる點にあり。氏は恰かも幾何學が事實上其の定理を、空間上の形の定義より導き出すを得ると同じ方法で、實體の概念より凡ての實在並に活動を導き出すを得と信じたり。故に氏は其の著「エチカ」中に於て、幾何學的方法によりて導出せる形而上學的主張は、幾何學的定理と同じく、動かすべからざる證明力を有すと信じたり。此の際氏の看過せる事は、幾何學は自ら作れる概念を取扱ふに、哲學は發見され與へられたる概念を取扱ふものなる事にあり。第二の缺點は、そが世界活動より殆んど時間を除去せる點にあり。即ちスピノザは、其の概念的演繹法に於て、唯永恆固定的にして同様に存在するものゝみを見て、世界活動中には永恆の變化發展の存する事を注意せざりき。第三の缺點は、其の當時一般に行はれたるが如く、精神生活を純粹主知論的に解せる點にあり。デカルトと同じく、氏に取りては、精神生活の凡ては思惟なりしなり。然れども現代の

心理學は、意識の原始的活動形式は感情と意志とにして、思惟活動は是より初めて發達するものなる事を教ゆるなり。

故にスピノザの實體一元論は、其の硬くして變化なき形式の爲めに、吾人に充分なる満足を與へ得るものにあらず。ゲーテはスピノザによりて不朽の感化を受けたりしが、自ら獨立に、其の變化なき實體概念に活動性を與へたり。ゲーテは、神と自然との統一には甚だ同情を表したれども、氏に取りては、自然は生命發展不斷の變化なりしなり。故に一七九七年にシェリングの自然哲學の現はれたる時、甚だ喜びて之を迎へたり。此の書はスピノザの根本思想たる自然と神との統一に基き、而かも之に發展の觀念を結合せしめたるものなりき。

シェリング(一七七五—一八五四)は、明かにスピノザの思想を採用したりしが、己に其の最初の著書の一つに於て、スピノザのエチカに對して補充をなすべき觀念が實在せることを證すべき希望を述べたり。又其のヘーゲルに送れる書中に「予は今スピノザ教徒となれり、君は遠からず其の理由を知

り得べし」といへり。シェリングに取りても亦自然と精神とは絶対の顯現の形式にして、宇宙は統一的性質を有するものなりしなり。而してスピノザと異なる所は、シェリングは自然と精神とを以て絶対の屬性と見ずして、二つの極と見たる所にあり。シェリングは、磁氣若くは電氣の現象の顯はすが如き、兩極性の法則を宇宙法則と見たり。而して磁氣が中央に於ては南北何れをも指すことなく、兩方面に無關係なると同じく、絶対も亦各別に自然と精神とに於て顯はるとなせり。然れども此の際、絶対の眞の本質は、猶精神的として存在す。故にシェリングよりいへば、自然とは可見となれる精神に外ならず。従つてシェリングが「同一哲學」と名づけて、思惟と實在と全く同一なりと述べたる説は、猶又唯心論に傾けるなり。更にシェリングに於ては、絶対は其自身不變にして常に同様なれども、種々なる形式に於て現象中に現はるゝなり。氏は此の過程を以て發展過程なりと解したりき。尙氏は絶対の兩極の中にては、特に詳に自然を論じ、其の「自然哲學」は必ずしも斯學の發達を促がす程に影響を及ぼすには至らざりしも、暫時の間は重要な感

化を與ふるを得たりき。現代の自然科学は、シェリングが自然の法則を哲學的觀念より演繹せむとせし方法を斷然排斥し、遂に之を壓服せしが、近來又シェリングが凡ての自然力を統一的原理より説明せむとせし思想が、大に正當なるものなることを解し始めたり。蓋し現代の自然科学は、漸次、凡ての自然活動は統一的勢用の變形變位と見る考に到達したればなり。

實體一元論は、ヘーゲル(一七七〇—一八三一)に於て、猶一層包括的統一的に論述せられたり。思惟と實在との同一につきてヘーゲルの解せし所は、概念の論理的或は辨證法的進化は、同時に宇宙活動の進化なりといふ如くなりき。故にシェリングの兩極性の法則は、ヘーゲルにありては、概念の純粹なる論理的矛盾となる。従つて凡ての概念は、ヘーゲルの論にては、其の反對矛盾を思惟すべきを強ゆるなり。例へば凡ての甲は直ちに其の補ひとして非甲を要求するが如し。然れども概念が己に自己より反對矛盾を出したる時は、直に此の兩概念を一層高き一概念中に綜合せむとする論理的要求起る。ヘーゲルはかくして綜合する事を揚留と稱せり。故に唯概

念の自己發展を思辨的に追思すれば、絶對的眞理に達するを得。ヘーゲルは内容なき純粹の存在の概念より出發して、自然として自己中より自由に發展する觀念に到り、更に再び精神として自己中に歸ることを説きたり。其の精神の發展は、主觀的精神客觀的精神絶對的精神の三階段にして、之によりて發展は其の頂點に達し、又再び其の出發點たる純粹なる存在に歸るなり。而して此の最後の絶對的精神は、藝術・宗教・哲學に於て表はるゝものなり。シェリングは主として其の注意を自然に向けしが、ヘーゲルの長所は其の精神哲學にあり。殊にヘーゲルは、客觀的精神は、權利・道德・人倫に於て實現し、家族生活及び國家生活中に明に存在すと説き、此の概念によりて頗る歴史的觀察法を重用視したりき。之によりて氏は、個人は凡て客觀的精神の影響の下に立ち、精神發展の階段は凡て、前行の發展を精細に研究してのみ初めて理解し得ることを明にせり。然れどもヘーゲルは、其の辨證法的方法は精密なる自然科学的并に歴史的研宄をなす勞力を省き得るものにして、實在并に活動の法則を思辨的に演繹し得となせり。故に精密なる

自然研究者は、氏の及ぼす影響に對しては、極力之に反抗せざるを得ざるべく、従つてヘーゲルは、特殊科學者間には、烈しき反對者を有せり。されど今日の如く已に事實研究の勝利を得たる時にありては、勿論人類知識の發展に關するヘーゲルの效績について、公平なる評價をなすの寛量を有するに至れり。ヘーゲルの哲學は、其の偉大にして包括的なる體系として已に充分尊敬賞讃に價するに、更に其の學說の積極的内容よりして、凡ての精神的活動の歴史的觀察法を遺すに至れり。

要するに實體一元論は、エレア學派とスピノザとに於てのみ最も嚴密に論ぜられ、シェリングとヘーゲルとは之に發展の思想を加へ、而かもシェリングは實際的變化の意味に於てし、ヘーゲルは寧ろ發展を以て概念の自己發展と解したり。同時にシェリング及びヘーゲルにありては、何れも絶對の本質を精神的性質となすを以て、此の一元論は共に唯心論的色彩を有す。

現代の自然研究者、殊にエルンスト・ヘッケルは、此の一元論に再び唯物論的基礎を與へたり。かの廣く讀まれたる、宇宙の謎中に於て、ヘッケルは種々の

力と傾向とを有する物質より出發して、世界活動は統一的發達進程なりと述べむと努めたり。此の發達進程に於ては、凡ての個人的并に社會的生活の最も複雑なる現象は、已に自己の中に精神的生命の萌芽を有する單純なる物質的要素より漸次發展するものなりといへり。

之に反して、他の方面より生理的并に物理的學說に立ちて、實體概念の如き固定的にして常に一樣なる質料を、全然宇宙觀察より斥け、唯永恆規則的なる變化のみ存在するものと見むとする企起れり。此は稍難解なるものなれども、嚴密に徹底せる考にして、前に活動一元論と名づけたるもの是なり。次に之が説明を試むべし。

第五章 活動一元論

實體一元論と同じく活動一元論も亦已に希臘の古代に於て起れり。エフェゾスのヘラクリット(紀元前五百年頃)は、殊更にエレア學派に反對して生成

と變化とを以て世界活動の原理なりとし、一切は流る、決して何物も住まることなしといへり。かく世界活動を水流に比して、何人も再び同一水流中に入るに能はず、流は決して同一なることなければなりと説けり。されどヘラクリットは、此等の凡ての變化中にも、一種の宇宙理性の如き法則の支配する事あるを認識し、之をロゴスと名づけたり。此の宇宙秩序は、凡ての物に對して同一にして、神若くは人の創造せるが如きものにあらざ、三世を通じて存在する永恆生々の火なりと言ひしが、氏によれば火は原質をなすものにして、又永恆活動の表號たるが如し。更に又ヘラクリットは、已に、常に高きに進む發展の思想を解し、其の結果鬭争を以て凡ての事物の父なりと稱したり。蓋し氏は、神も人も主人も奴婢も、皆此の鬭争より出でたりとせるなり。

ヘラクリットの思想は、一部分ストア學派によりて採用せられたりしも、此の學派は、已に氏の根本思想を完全に解するを得ざりき。又ゾロダールノ、ブルノにありては、其の狂熱的精神が永恆生成の思想に充ちたる點に於て、

ヘラクリットの思想の痕迹を見る。ヘーゲルは自己の體系の根本觀念はヘラクリットにありと信じ、其の弟子ラサールは、此の意味に於てヘラクリットに關し二卷の著書をなせり。ヘーゲルもラサールも共にヘラクリットの言に原意以上の意味を附したること疑なしと雖、其の主要なる點に於ては、必ずしも誤れる斷定をなしたるにはあらず。即ちヘラクリットが、宇宙を以て固定的實體とせずして世界過程と見たりとす點是なり。

近世の自然科学者は、進化論に立ちて著しく此の思想を採用して、之を論理的に徹底せしめたり。以下此の最新一元論を論述する前に、進化論につき一瞥すべし。

カントは其の著天體の一般自然史及び理論(一七五五年公刊)中に於て、無機世界は機械的法則に従ひて進化すとの考を嚴密に徹底的に論じたり。氏が熱せる瓦斯體の星雲より太陽系成ると説ける假定説は、後佛國の天文學者にして且つ數學者なるラブラースによりて、同じ方法を以て論究せられたり。されどラブラースは、カントとは全く獨立して此の觀念に達した

るなりき。故に一般に之をカントラブラース説と稱す。ヘルムホルツは其の明快なる論文中に、此の説は現在の科學的研究の狀態と最もよく適合せるものなることを述べたり。然れどもカントは有機世界につきては殊更に差控えたり。故に此の假定につきて信を有せしことは、予に物質を與へよ、是より予は宇宙を構成すべし、即ち物質だに與へられなば、宇宙が如何に是より成立するかを示し得べしといへる程なりしも、雜草若くは毛蟲の如きもの、生ずるにつきてすら、之を説明し得とは信ぜざりき。

ゲーテ・ラマーク・ジエフロア・サンチレル・スペンサー并にダーウィン等の研究によりて、有機世界進化の思想大に促進せられ、今日にては何人と雖、複雑極まる有機物も、單純なる要素より進化せるものなることを知り、又少くとも此の進化の法則を豫知せり。進化論よりいへば、生命の根本性質たる、生長すること、養分を取ること、及び内的機能を外圍に順應せしむること等は、其の要素中に已に存すと假定せざるべからず。此の要素を細胞・神經原等と稱す。然れども唯一つ確實なる事は、凡ての機關も機能も、其の有機體

及び其の種族を保存する傾向に基きて發達せる事是なり。此の如き觀察方法より生ぜる生命の法則の學は即ち生物學にして、こは特殊科學の熱心なる研究によりて大なる進歩をなし、遂に自ら人類の精神的生活を生命保存の立脚地、即ち生物學的原理に従ひて研究することを以て其の任務となすに至れり。ハーバート、スペンサーは其の心理學原理中に於て初めて之を企てたり。氏の生命概念の解釋は、幾分狭きに失せるものなりしも、之によりて精神過程を更によく解せしむるに貢獻せる所甚だ大なりき。

若し人の有機體中に於て起るものは、凡て是れ生活過程なりとして解し得べしとせば、心理的現象と物理的現象との結合點を發見し、以て實際に兩者を統一する概念を假定し得べき可能の存するを見る。此の概念より凡ての活動を更に廣く觀察し、今日までに出でたるものよりも一層徹底せる嚴密なる一元論的解釋を得べし。此の説はリヒャート、アズナリウス并にエムンスト、マッハによりて採用せられたるものにして、就中アズナリウスの開ける「經驗批判論」は、古今に於て最も徹底したる一元論的體系なりといふべし。

アズナリウス及びマッハは、各獨立に且つ異なる方法によりて其の結果に達せるなり。アズナリウスは、初めは大にスピノザに私淑し、其の影響によりて宇宙を嚴密に一元論的に解釋し得べしと確信し、唯物論的立脚地より出發せり。然るにマッハは、初めは唯心論と關係し、其の青年時に於て已にカントの「將來一切の形而上學に對する序論」を讀みて、超認識的なる「物其者」を假定する事は全く無用なりと考へたりとは、氏自らのいふ所なり。

アズナリウス、マッハの一元論の根本思想は、物理的現象と心理的現象との間の區別を融沒するにあり。されども此の二人は、かく融沒するを唯物論的假定若くは唯心論的假定によりてせるにあらざりて、實に自我意識を精密に分析して之をなせるなり。恰かもコペルニクスが地球中心説を捨て、地球は唯宇宙間の一點に過ぎずと見ざるを得ざらしめたると同じく、此の二人も亦吾人が自我と稱するものは、單に個々の要素過程の複合にして、而かも此の複合は鞏固なれども、決して分解するを得ざるものにあらざる

ことを證明せむと勉めたり。此の自我概念を分析する事は、デュービッド、ヒュームが已に之を企てたる所にして、エルンスト、マッハは其の認識論上の問題及び其の他に於て、彼と甚だ相近き點多し。吾人の自我を作る要素過程と環象の諸過程との間には依存關係存し、而して此の依存關係は其の種類に於ては宇宙の他の諸過程の間に行はるゝ依存關係と全く異なるものにあらず。數學者は分量に於ける各種の依存を概括して、函數なる普遍的概念を作りしが、それは例へば a は b の函數なり ($a = f(b)$) といひて、 b の變化は a の分量變化と常に相關係することを表はすにあり。若し此の函數の概念を、分量上の依存關係に限らず、更に進むで性質上の依存關係をも表はし得るものなるが如く擴張すれば、宇宙に於ては、相互の間に、函數的關係の存在する要素以外のものは、一も存在せずといふを得べし。かくすれば科學の任務は、此等の要素と其の函數的關係とを能ふ限り簡單に記載するに外ならざるに至るべし。而して經驗の經濟的配列組織は、同時に此の如き記載と相伴ひ、以て唯一度考ふれば其の共通要素を解するを得、從つて最も僅の思惟

を費して最大の函數的關係を了解し利用するを得べし。例へば數の概念の如きは、最高普遍の關係を簡單精緻なる形式に於て取扱ふを得しむる有用なる思惟の具に外ならず。

此故に宇宙は秩序的に配列せられたる事象に外ならざること、近時の自然研究者(ハインリッヒ、ゴムペルツ)のいへるが如し。從つて此の間に於ては實體若くは原因を説くべきにあらず。是を以て凡ての實體の如きは、直ちに作用活動の系列中に消失すべく、此の作用活動中にありては規則的の繼起と并存とをのみいひ得べく、決して因果的結合を見るべきにあらず。但し有機體の生活に於ける、生物學的機能の合目的性のみは、未來に於て精密に且つ經濟的に組織配列する記述に對して獨特の目標即ち指導者として存するのみ。

函數的關係に支配せらるゝ要素は、アエナリウスに於ては物質的質料的性質を有するものなり。氏は凡ての人類を其の環象と共に觀察して、根本并存即ち初めより存する同等同質の相互關係なりとなせり。而して、自我